
もし、彼女がスターだったら・・・

乙女一世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もし、彼女がスターだったら・・・

【Nコード】

N9681U

【作者名】

乙女一世

【あらすじ】

大学生のお決まり、夏のナンパ。ひと夏の遊び？それとも本気？ それぞれの思いを持ったまま始まった恋。そこに絡むまさかの人気歌姫。スターだって、人の子、恋だっただけ。その相手が一一般の男性だっておかしくない。でも、その恋は、簡単にはいかなかった・・・。

第1話 「海水浴」(前書き)

登場人物、名称は、架空のものです。

第1話 「海水浴」

夏の強い日差しが照りつける海岸通り。

海水浴客の車が行列を成す中に、男子大学生3人を乗せた真っ白なワゴン車があった。

その車内には、カーラジオが大きな音で流れていた。

「さあー、いよいよ1位の発表です。

全国CD店売上数及び、インターネットダウンロード数集計の結果、今週のシングル曲トップに輝いたのは、・・・

先週と変わらず・・・鮎川瑠美のホット・サマーです。

これでなんと、3週連続1位となりました。（拍手）

CDの売り上げが、累計130万枚、ダウンロード数は400万を超えました。（拍手）

そして、同時に発売されたアルバム売上は300万枚を超えました。シングルもアルバムも3週連続1位です。

これで、デビュー曲からシングル8枚全てが、CD売上、ダウンロード数ともにミリオン超えとなりました。

CMも8本と引っ張りだこ。

彼女の人気は、もう止まらな～い！。

今日は、ある海水浴場で、シークレットライブが予定されているそうです。

今日、海水浴に行かれる方は、もしかしたら、鮎川瑠美さんに会えるかもよ～。

では、お届けしましょう。今週の1位、鮎川瑠美でホット・サマーです。」

軽快なリズムに乗って、鮎川瑠美の歌声が車内に響き渡った。

時流のヒット曲を聴きながら、ハンドルを握る土田守が、しゃべりだした。

「この曲は、好きなんだけどさー。鮎川瑠美って、可愛いのを鼻に掛けてんじゃねえ？」

助手席で、ナビ担当の水越渉が、それに反応した。

「おいおい、守。鮎川瑠美が好きなのが、後ろに居るんだけど・・・」

後部座席でポカーンと外を眺めて、鮎川瑠美の歌を聴いていた野田誠が答えた。

「別に気にしなくていいよ。ちょっといいなーって思ってるだけだから。」

土田守が、待ってましたとばかりに反応した。

「そっだよなー、ミュージシャンや女優なんか好きになったところで、どうなるもんでもないし。ライブとか全国追っかけてる奴の気がしねえーよ。誠は、鮎川瑠美のどこがいいのさー？」

呆れた様な言い方をされたが、野田誠はにこやかに答えた。

「そーねー、顔は、ほとんど理想だし。テレビなんかでの、話し方なんかも好だし。」

曲もいいし。」

土田守が呆れた様な言い方のまま返した。

「なーんだ。全部好きだったってことか。」

水越渉が、わざと話の方向を変えた。

「海水浴場で、シークレットライブとか言ってたけど、もしかして、俺達が向かってる湘南じゃねえーの？」

土田守が、野田誠に質問を振った。

「誠、どうなんだよ？ 好きなら、どこでやるか知ってるだろ？」

「フアンクラブとかに入っていると、分かるんだろうけど、僕はそこまで、ハマッテないから。」

野田誠が、言い訳するように答えた。

土田守が、外を見ながらしゃべった。

「湘南は、人が多くてゴミゴミしてるから、違つかもな。」

助手席から外を見ている水越渉が、喰い付いた。

「そうかー？ 人が多い方がいいんじゃないの？」

すかさず土田守が反論した。

「地方のもっと綺麗な所じゃないの？ 千葉とか伊豆とかさ。」

水越渉が考え直したように答えた。

「まー、人が少ないと、しらけるし、葉山とか逗子なんかのお洒落な所かもな。」

ハンドルを握る土田守が、車の流れが止まったのを感じて、声を大きくした。

「あれー、こんなに朝早いのに、渋滞してるよー。」

ナビ担当の水越渉が、カーナビを見て答えた。

「でも、ナビだともうすぐ着くよ。きつと駐車場に入るのに、つつかえてるんだよ。」

渋滞は水越の言った通り駐車場のせいで大したことなく、3人を乗

せた車は、目的の海の家に到着した。

第1話 「海水浴」(後書き)

お読み頂きありがとうございます。不定期更新ですが、宜しくです。

第2話 「行動開始」

3人は、海の家にてエックインをすると、直ぐに着替えて砂浜に近いテーブルに陣取った。

目の前で、焼きそばを焼いているので、空腹の3人は、匂いに誘われて腹ごしらえを始めた。

最初に食べ終えた土田守が、2人をせかした。

「さーで、空腹も収まったし、そろそろ行動開始と行きますか？」

待つてましたとばかりに水越渉が、周りを見渡した。

「おい、あの白いビキニの娘こ、好よくなーい？」

野田誠が、水越渉のしている方向に目をやった。

「んー、なんか、遊び慣れてるような・・・。」

「遊びに来たくせに！」

水越渉が、何言ってるんだとばかりに、直ぐに突っ込みを入れた。

水越渉の言った言葉が耳に入っていないのか、野田誠は平然と返した。

「タイプじゃないんだよなー。」

水越渉の目に別な娘こが映った。

「じゃー、あつちのオレンジの娘こは？」

「髪型がね〜。」

野田誠は軽く受け流した。

水越渉は簡単にダメ出しする野田誠にいらついた。

「何だよ、声掛ける気あるのかよ！」

熱くなつた水越渉に土田守が割つて入つた。

「無駄だよ、渉。誠にそんな勇氣なんか無いさ。」

「そんなことないよ。ただ、気に入つた娘むすめが居ないだけだよ。僕よりも、渉はどうなのさ。言いだしっぺだろ。」

野田誠は、勇氣が無いと言われたことが気に触り、少し強い口調になつた。

水越渉は、野田誠が言い返したことで、冷静さを取り戻して、軽くないした。

「俺は、ゆつくりとなー。」

しかし、野田誠のアドレナリンは止まらずに、余裕有るような態度の水越渉に切り込んだ。

「なんだよ。自分だつて、声掛けれないんだろ？」

水越渉は、平静に答えた。

「そんなことはないさ。やる気のない誠のお陰で、ちょっと冷めただけだよ。」

雰囲気が悪くなるのを気にした土田守が、思いついたように言った。

「なー、誠の好みつて、鮎川留美だよな？」

野田誠は、急な質問に、少し警戒した。

「まあー、そうだけど。」

2人とも声を掛けられないだろうと思つた土田守は一工夫してみた。

「よし誠、それじゃー、鮎川留美に似た娘が居たら、声掛けるよ。渉、探そうぜ！」

水越渉が面白がって、やる気が戻った。

「分かった。見つけてやるから待ってな！」

困ったように、野田誠は言った。

「おーい。居るわけないよ。」

野田誠、水越渉、土田守の3人は、今年から東京創工大学に通う、ゼミの仲間。普段から仲が良く、3人で居ることが多かった。

夏休みのある日、もてない渉が、彼女の居ない誠に「ナンパしよう！」と、湘南海水浴に誘ったことが、少し変わった恋愛物語の始まりだった。

誠は、高校3年の夏に、ずっと好きだった可愛いクラスメイトの女子に一大決心で告白した。彼女は、誠に関心が無かったが、あまり第一印象を気にしないでとりあえず付き合ってみようとするタイプだった。また、本命の彼氏と出会っていないと思っていたらしく、複数の男子と付き合っていた。それが幸いして誠とも付き合ってくれることになったが、誠はそんなことは知らなかったので、有頂天になり喜びいっぱいだった。

テニス部だった誠は、練習が無いある日、廊下ですれ違った時に満面の緊張で、一緒に帰ろうと彼女を誘ってみた。彼女は快く了解してくれて、帰りに人気のドーナツ店で、初めて向かい合って話をした。誠には夢の時間が過ぎていたように思えた、ところが、誠にとって、彼女から衝撃の言葉を聞くことになった。彼女は、他にも4人と付き合っていると打ち明けたのだった。誠には理解不能の言

葉だったけれども、自分と付き合ってくれらるということ、それが大事なことと割り切って、動揺しながらも気にしない素振りをした。

毎日、テニス部の練習が忙しく、なかなかデートの時間が作れなかった誠は、彼女からすると物足りなく感じられて、他の4人よりもだいたい影が薄かった。

そんな中、やっと空いた日曜日に2人で映画に行くことになった。誠は、映画が見たかった訳ではなかったが、デートの経験が無い誠には、他に考えが浮かばず、昔からのデートのセオリーに頼っただけの事だった。

待ち合わせの場所に現れた彼女は、当然いつもの見慣れた制服とは違った雰囲気のお洒落着姿だった。ナチュラルメイクも決めていた彼女を前にした誠は、緊張のあまり自分から話し掛けることが出来ずに、ただ興味の無い映画を見ることになってしまった。映画の帰りにお茶してみたものの、それでも誠は、ただ映画の感想を話すだけで面白いことも言えずに時間が過ぎた。彼女もまた特に映画が好きでも無かったので、退屈な時間を過ごしただけの印象を持ってしまった。

次の日、彼女に放課後呼び出された誠は、一緒に居てもつまらなさと、あっさり交際を断られてしまった。天国から地獄に突き落とされたような誠は、落ちに落ち込んだ。どうして良いのかも分からず、ただ自分に自信を失ってしまい、女子と付き合うことが出来なくなってしまう。そして芸能人に興味を持つことで現実の恋愛から逃げるようになってしまった。

それから数カ月、大学に入った誠は、徐々に傷も癒え始めた。ともあれ思春期の誠に彼女が欲しい気持ちが消える訳もなく、もしかしたら若干の期待を持って、意気込む渉の誘いを何となく受けてみる気になった。

2人は、いつも行動を一緒にしている守を誘おうとしたが、守に

はゼミで仲良しになった彼女、松本由香が居たことから、誘わない方が良いのではと迷った。しかし、ナンパに付き物の車を調達しなかったのも、自慢の7人乗りのワゴン車を乗り回している守を結局誘うことになり、守も彼女がいるくせにノリノリで、一緒に行くことになった。また、守の親の伝手で安く泊まれるホテルに1泊、しかも費用は、守持ちというおまけまで付いて。

第3話 「水色のTシャツ」

土田守が、大声を上げた。

「イターツ！ ほら、あそこの水色のTシャツ。」

水越渉が慌てて駆け寄り、土田守の指さした方向を見た。

「えっ、どれー。んーんー、似てる似てる。」

土田守と水越渉が、野田誠を大声で呼びながらおいでおいでのジェスチャーをした。野田誠は仕方なく歩み寄ったが、似ているなんて鼻から信じていないとばかりに言った。

「そんなに都合良く、似てる人なんか居るはずないよ。」

土田守が野田誠の腕を掴んだ。

「いいから、ちょっと見てみるよ！ ほれ、あそこ。」

野田誠がおもたい首を向けた。

「しょうがないな。・・・あつ！」

野田誠の顔色を見た土田守は、自信を持った。

「ほら、似てるだろ？ 行くしかねえな。」

野田誠は、本当に似ていたので、怖くなった。

「マジで？ マジ行くの？」

土田守は強気に出た。

「おー、ルールだからな。」

野田誠は、逃げ腰になった。

「そんなルール承諾したつもりないし・・・。」

水越渉も、何だか強気だ。

「いいから、行って声掛けるよ!」

野田誠は、諦め気味になった。

「参ったな〜。」

仕方なく、誠は、重い腰を上げて歩き出した。

目標の水色のTシャツの娘に近づくと、周りの雰囲気が変わっていた。目標の水色のTシャツの娘は、4人の男にガードされて、砂浜に作られたステージの裏側へ向かって歩いていた。

誠は、10メートル位に近づいた時に、やっと気が付いた。

「似てるんじゃない! あれは、鮎川留美だ! 本物だ!」

誠は、振り返ると、渉と守に手を振って、「こっちへ来い。」と、手招きした。

2人もステージが在ることに気づき、走ってやって来た。

ステージの表側に回ると、前の方は若い男女でいっぱい、後ろの方に立つしかなかった。

土田守は、良く似ていたことに納得した。

「どおりで似てるわけだ。」

野田誠は驚きで口が開いていた。

「まさか、本人とはね。」

水越渉が、突っ込みを入れた。

「いつそのこと、本人をナンパしてみたら?」

野田誠は、馬鹿にされたように感じた。

「何言ってるんだよ！ 近づくことだっただけできないよ。」

土田守がつまらないことを言い出した。

「そんなことないんじゃない？ 俺達2人が、取り巻き4人を引き付けばさ。」

野田誠はくだらなく感じた。

「できる訳ないだろ。お前らが、K-1でもやってるんなら分かるけど。」

土田守のいつもの悪い癖が出た。

「誠が本気でナンパする気があるなら、俺達付き合ってもいいぜ。なっ、渉？」

さすがに水越渉も、返事に困った。

「えっ、まあ。」

野田誠は、土田守の顔が真剣な表情に見えてしまった。

「芸能人と付き合うなんて、思ったことも無いし、100パー無理に決まってるしいいよ。でも、本気で言ってくれてるみたいで、ちよっとうれしいよ。」

土田守は、誠の表情をよんだ。

「俺達、ガチでやる気あるんだけど。なっ、渉？」

水越渉は困っていた。

「えっ、まあ。」

野田誠は、ステージを見ていた。
「おっ、始まるよ。」

第4話 「シークレットライブ」

音楽が鳴り出して、男性の司会者が登場した。

「お待たせしましたー。始まりまーす。サマービーチフェスタ・イン・湘南。」

司会は私、万年夏男の内海照夫です。

2日目の今日は、なんと、あの、乗りに乗ってる 鮎川留美さんが来てくれてまーす。

では、早速、呼んでみましょう、せーの！ 留美ちゃん！」

ステージのそでから鮎川留美が登場した。

「みなさん、おはようございまーす！ 鮎川留美です。」

司会者 「いらっしやーい！ 僕は、お会いするのは初めてなんです、本当に可愛いらしいでね。」

鮎川留美 「いえいえ、そんなことないです。」

司会者 「今日の出演は、内緒だったということ、びっくりしている方も大いと思います が……。」

鮎川留美 「はい、シークレットライブということで、一部のファンの方だけがご存じだったと思います。」

司会者 「それでは、今日突然ここで、鮎川留美さんのライブを聴ける人は本当にラッキーな方なんです。」

鮎川留美 「いえいえ、そんな、ラッキーな方だなんて、私の方がラッキーだと思います。」

こうして私が、ライブをすることが出来て、こんなにたくさんの方が聴いて下さる、そのことが、私にはとても幸せな事です。」

司会者 「なるほど、謙虚でいらっしやいますね。そんなところも、人気の秘密かもしれません。えー　　っと、ところで、留美さんは、泳ぎの方は、どうなんですか？」

鮎川留美「あーっ、私、全然泳げなくて、学校の授業なんかでも、泳いでるのが、溺れてるのか判らな　　いなんで、言われてました。(笑)」

司会者 「おっとー、そんな風には見えませんが、でも、留美さんが溺れていたら、ここに居る大部分　　の方が、我先にと助けに行くんでしょね。」

鮎川留美「嬉しいような、怖いようなですかね。(笑)」

司会者 「それでは、湘南シークレットライブと称しまして鮎川留美さんには、これから約30分間、　　歌って頂くんですが、何かテーマみたいなものがありますか？」

鮎川留美「そうですねー。私、泳ぎは苦手なんですけど、夏は小さい時から大好きで、暑さに負けず、い　　つも外で弾けていたんです。だから、皆さんも、冷房に当たってはかりでなく、外に出て青　　春と一緒に弾けましょうみたいな。」

司会者 「家でゲームばかりやってちゃいけないよって、ことですね。はい、それでは、留美さんにマ　　イクをお渡しします。元気に青春を弾けてください。」

鮎川留美「はい。ありがとうございます。それでは、初めの曲は、ホット・サマーです。アップテン　　ポな曲なので、皆さん

一緒に弾けましょー！」

ライブは盛り上がり、熱いビーチは、更に熱くなった。
アンコールも歌い、鮎川留美のライブは興奮の渦の中、約40分
で終わった。

3人も、飛んだり、跳ねたり、歌ったりで、すっかり疲れてしま
った。

誠が2人を見て切り出した。

「なーんだ、ノリノリで、渉も守も鮎川留美が好きなんじゃないの
？」

守が右手を振りながら答えた。

「そんなことないよ。」

渉が当たり前のような顔をして言った。

「場の空気をよんで、はしゃいだけだよ。」

守が付け加えた。

「そうそう、カラオケと一緒に。」

誠は、ちょっと悔しくなった。

「でも、可愛いと思うだろ？」

守は少し抑えて言った。

「そりゃー、普通の子よりはねー、でも趣味じゃないなー。」

渉がまた、守に付け加えるように言った。

「芸能人を好きになっただて、一方通行で、永遠に片思いだからねー。」

「

誠は、なんだか悔しかった。

「そりゃー、そーだけど、歌もいいし、心豊かになるじゃん。」

守は一般論を良く口にする。

「でも、芸能人なんて、周りを蹴落として、生き残り合戦してるんだから、結構性格きついに決まってるよ。ファンの前では、好かれるように振舞ってるのさ。」

誠は鮎川瑠美はそうじゃないと信じていた。

「そうかなー。親の借金で小さな頃から結構苦労していたから、人の痛みが分かる優しい人だと思うんだけどなー。」

守は、勝手な道理をたまに言う。

「何言ってるの？ 小さな頃から苦労していたら、性格が強くなるし、周りの人がうらやましくなって、自己中心的になるんだよ。」

誠は、守よりも鮎川瑠美の方が好きだ。

「そうかなー。そうは見えないんだけどなー。」

渉は鮎川瑠美の話が飽きた。

「もう、芸能人なんかいいからさ、ナンパしようぜ。」

守も鮎川瑠美の話から抜け出したかった。

「そうだよ、時間ないぞ。ほら、頑張ってください。」

渉が、前を歩く髪の長い娘を見て言った。

「誠、あの娘どうよ？」

誠の好みじゃなかった。

「ん〜、なんかなー。」

実は渉の好みのタイプだった。

「何だよ、やる気あんのかよ。まー、鮎川瑠美を見た後じゃ仕方ないか。」

誠はヤル気が無くなっていった。

「まーな。」

渉は適当に言ってみた。

「じゃー、あの赤色の水着の娘は？」

誠はヤル気が無い。

「ちょっとなー。」

渉は、誠の気持ちに気づいた。

「それじゃー決まんねーよ。とりあえず、行こうぜ！」

誠は、面倒に思えた。

「えー、マジ？」

渉は強引さが必要と判断した。

「マジ、ほら。」

渉は、気乗りしない誠の手を引っ張って歩き出した。

赤と黒の水着を着けた2人の女の子が歩く前を、渉と誠が遮った。

渉が切り出した。

「2人で来たの？ どこから来たの？」

女の子Aが面倒くさげに言った。

「ナンパしてるの？ 用ないんだけど。」

渉は引かなかった。

「かき氷でも食べない？ 君、イチゴみたいだから、いちごミルク味でも。」

女の子Aの顔が歪んだ。

「まじウザイんだけど。」

渉は、この娘達はかき氷が好きじゃないと思った。

「じゃー、スイカは？ あっちに冷えてて、すごく美味しいの有るんだけど。」

女の子Bは勘違いをした。

「えっ？ 海の家呼び込み？」

渉はジェスチャーを付けて言った。

「ノーノー、ナンパ、ナンパ。」

女の子Aは、呆れた。

「ばっかじゃないの？ 行こう由美。」

2人の女の子は、早足で行ってしまった。

渉は自分は頑張ったと思っていた。

「誠が、何も言わないのが悪いんだぞー。」

誠は、女の子に端からその気が無いように思えた。

「そうかなー。」

渉は自分の努力が解って欲しかった。

「そうだよ。あれでも、俺、スゲー頑張ったんだから。可愛い女の子前にして、あんなにしゃべったの初めてなんだから。それも、水着。ビキニだけ。」

誠は、渉の気持ちがあった。

「そうだったんだー。でも、今は、年上だよ。女の子としゃべる練習するなら、うちのサークル入ればいいじゃん。」

渉はそうしようとも思った。

「テニスだっけ。でも、俺、運動音痴だからな。誰も相手してくれないよ。」

誠はどうしてそう思うのか分からなかった。

「そんなことないと思うけどな。」

渉は気持ちが冷めてしまった。

「今日は、もう止めよー。なんか疲れちゃった。」

守は雰囲気を感じた。

「それじゃー、ホテル行こうぜ。ひと風呂浴びて、作戦でも練ろう。」

3人は、予約して有った近くのホテルに向かった。

第5話 「ホテル」

3人はホテルに着いた。

水越渉と野田誠は、ロビーのシャンデリアに目がとまった。

渉が思わずつぶやいた。

「へー、案外、綺麗なホテルじゃん。」

誠も宿泊料が気になった。

「本当に、俺たち払わなくていいのかよ？」

守は全く気にしていなかった。

「あー、大丈夫だよ。親父の病院の福利厚生で契約しているホテルで、安くなるから気にすんなよ。」

フロントの女性が、にこやかに迎えてくれた。

「いらっしやいませ。」

守が、カウンターに乗り出して、女性に近づいて言った。

「予約してある土田ですが。」

フロントの女性は、顔を近づけて来た守に、嫌な顔もせずに対応した。

「はい、お待ちしておりました。こちらにご記入お願いします。守が記入すると、続けて案内した。」

「ありがとうございます。それでは、係りの者呼びますので、こちらのソファアでお待ちくださいませ。」

3人がソファアールに掛けると、渉が小声で言い出した。

「あのフロントの人、良くねえ？　なんか俺、あの落ち着いた声にぞくぞくしちゃった。」

守が、うなずきながら言った。

「解る解る。俺も自然に、顔が近づいて行っちゃったよ。」

呆れたような感じで、誠が言った。

「自然に、って、あれが？」

案内係の女性が来た。

「土田様でいらっしゃいますか？」

守が、はいと答えるや否や、その可愛らしい女性は、

「部屋まで案内致します。お荷物がございましたらお預かりいたします。」

と言い、3人は言われるままに、リックサックを渡した。

その案内係りは、受け取ったリックサックを、台車に載せると、

「お部屋は、8階の3号室でございます。それでは、あちらから参りますので、お後にお続きくださいませ。」と言って、台車を押してエレベーターに向かった。

エレベーターに乗ると、ラベンダーのような優しい香りがした。

守が、案内係りに、突然話しかけた。

「とてもいい香りの香水をお付けですね。」

「いいえ、私は、何もつけていませんよ。そこの芳香剤の香りじゃありませんか？」

と、にこやかに案内係りは返した。

守は、ばつが悪うそうに言った。

「あつ、そうだったんですか。可愛いあなたにお似合いの香だったから、

てっきりそう思っちゃって、すみません。」

その可愛い女性に、にっこりしながら、答えた。

「いいえいいんですよ。でも、お口がご上手ですね。可愛いなんて言われたの、何年ぶりでしょうね。はい8階に着きました。出ましたら、右手で御座います。」

案内係りの女性がエレベーターを降りかけた時に、渉が突然、少し大きな声で言った。

「本当に、可愛いですよ！」

案内係りの女性は、驚いたように振り向くと言った。

「あー、びっくりした。ありがとう。お世辞だと分かっているけど、嬉しいです。」

部屋のドアは開いていて、4人は中へ入った。

案内係りの女性は、お茶を入れながら、注意事項などを説明した。

渉は、案内係りの女性が出て行くとすぐに、窓のカーテンを開けて、外を見渡した。

「スゲー、眺めいいじゃん。」

誠は、渉の声に誘われて、窓の外を眺めた。

「本当だ。いい景色。」

守は、景色には関心が無いようだ。

「風呂行こうぜ！」

渉が、不思議そうな顔をした。

「部屋風呂だけじゃないの？」

何言ってるの、といった感じで守が答えた。

「温泉の大浴場が有るって、今説明してたじゃん。」

渉は苦笑いをしながら言った。

「はっはっはっ、顔に見とれて、聞いてなかった。」

守は、渉の顔を見て話した。

「おいおい、可愛いけどきつと年上だぞー。さっきナンパした子と
いい、渉は年上好みなんだなー。」

渉は、守がマジ顔で言ってるのを気にしながら、否定した。

「別にそう言うことじゃないよ。たまたま、顔が好みだったただけだ
よ。」

誠が、館内案内を見ながら、言った。

「そーかなー。」

守は、支度をすると、2人に声を掛けた。

「風呂行こうぜ。さっきの案内係りの人に会ったら、ナンパしちゃ
えばいいじゃん。」

渉が、調子に乗って答えた。

「んー、それもいいかも。」

3人は、誰に会うことも無く、大浴場まで来てしまった。

服を脱ぎ捨てると、大浴場の湯船に浸かった。

守が、頭にタオルを載せて渉に言った。

「残念だったな、渉。案内係りの人に会えなくて。」

渉が、天井を見上げて言った。

「残念なのは、俺じゃなくて、彼女さ。こんなイイ男を捕まえるタイミングを失くしたわけだからさ。」

誠が、笑いながら言った。

「そんなこと言っていると、僕が頂いちゃいますよ。」

渉が、少し慌てた感じで言った。

「何言ってるんだよ。誠の好みじゃないだろ？ 誠は、鮎川瑠美のようなのが好きなロリコンだろ。」

誠が、右の眉をあげながら言った。

「そんなことはないさ。彼女のように綺麗で、落ち着いた感じも好きだよ。」

守が、割って入った。

「まーまーまー、お2人さん。気持ちは解りますよ。僕もいいなーと思いましたが。こうしましょう、後でトランプで勝負して、負けたら彼女をナンパする。」

渉が意気込んだ。

「負けたらって、罰ゲーム？ なんか変だけど、俺はいいよ。」

直ぐに返事をしない誠に、守が訊いた。

「誠は、どーよ。」

ナンパしようと思って考えていなかった誠は、守が訊いてきたので仕方なく答えた。

「えっ、また、ナンパ？ まーいいですけど……。」

守が、仕切った。

「じゃー決まった。後でブリッジやるうぜ。」

3人は、風呂から出ると、予約した食事を摂りにレストランホールに向かった。

渋がフロアの人や料理を見て、つぶやいた。

「バイキングかー。色々食べれていいかも。」

守がはしゃいだ。

「俺は、肉、肉、肉。」

誠は、寿司を持っている人を見て言った。

「僕は、和食がいいなー。」

3人は、何度も往復して、腹いっぱい食べると、部屋に戻って行った。

第6話 「案内係りの女性」

部屋に入ると、布団が引いてあり、渉が、大の字になった。争いも無く自然に場所が決まり、休憩がてらテレビを見ていた。

少し経つと、守が声を上げた。

「トランプしようぜ！」

誠が、不服そうに言った。

「えーっ、トランプ？ 男3人で？」

守が答えた。

「風呂で言った事、忘れたのかよ。」

渉が言った。

「守、誠はやりたくないから、しらばっくれてるんだよ。」

守は気にせずに行った。

「それじゃー、負けた人は、さっきの案内係りの人をナンパすること。いいね。」

誠が困った感じで言った。

「僕、そんなの出来ないよ。」

渉が言った。

「負けなきゃいいじゃん。」

真剣勝負のブリッジが、始まった。

3人に笑顔が消えた。

ブリッジを始めて、20分が経った時、渉が叫んだ。
「やられたー！」

誠が嬉しそうに言った。

「はい、渉の負けー。」

守もほつとして、急に乗り気になった。

「じゃー、館内歩いて、探してみようぜ。」

渉がしよげた。

「えー、本当にやるの？」

守が、わざとらしく発破を掛けた。

「当たり前じゃないか。さあー、行こうぜ。」

3人は部屋を出て、エレベーターホールに向かった。

エレベーターが来てドアが開くと、なんと、タイミング良く中から探していた案内係りの女性が出て来た。

3人は、一瞬息を呑み、立ち止まってしまったが、案内係りの女性は、会釈をして廊下を歩き始めた。後姿を見た3人は、我に返った。

守が渉を見て、言った。

「ナイスタイミング。運まで味方してくれてるよ。ほら行けよ。」

渉は今一つ、自信が持てなかった。

「参ったなー。後で変な顔されても知らないからな。」

渉は、早足に追った。

近づく、渉は声を掛けた。

「すみませーん！」

案内係りの女性は、直ぐに振り向いた。

「はい、どうかされましたか？」

渉は、胸を右手で押さえて言った。

「あー、胸が痛いんです。」

案内係りの女性は、少しびっくりした表情になった。

「えっ？ 大丈夫ですか？」

何か原因に心当たりはありますか？ 救急車を呼んだ方が宜しいですか？」

渉は、案内係りの女性の顔を見ながら答えました。

「原因は、分かってます。」

案内係りの女性は、渉の顔をしっかりと見ていた。

「何でしょう？ 持病でも有るんですか？ それともぶついたりしましたか？」

渉は、さらに近づいて、目をそらさずに言った。

「あなたです。」

案内係りの女性は、どういふことかピンとこなかった。

「私？」

渉は、緊張のあまり、身体が固まっていた。

「はい、一目見て好きになっただんです。」

案内係りの女性は、その真面目な顔つきとロボットのよような身体の動きとのギャップに、思わず吹き出して笑ってしまった。

「えっ？ 酔ってますか？ それとも、罰ゲームか何かですか？」

渉は、額に汗をかきだした。

「酔ってなんかいませんし、本当なんです。出来たら、今から一緒に飲みませんか？ 歌がお好きだったら、カラオケでも。」

案内係りの女性は、病気ではないかと本気で心配していたことが、急におかしくなり苦笑した。

「あんまりびつくりさせないくださいね。心配して損しちゃいましたよ。でも、タイミング良かった。ちょうど、お仕事が終わったところなの。お腹も空いたし、すぐ傍にカラオケ店があるから、行きましょうか。」

思わぬ返事に渉は、驚いた。

「いいんですか？」

案内係りの女性は、笑顔のまま答えた。

「はい。カラオケ好きなんですよ。ちょっと支度してくるので、1階のロビーでお待ち頂けますか？」

渉は、喜びと緊張のあまり、思ってもいない言葉が口をついた。

「がってんだ！」

案内係りの女性は、その光景がおかしくて、また、吹き出した。

「おかしな人！ それじゃー、のちほど。」

案内係りの女性は、そう言うつと奥の部屋に入って行った。守と誠が、放心状態の渉の所にやって来た。

守が、笑顔でない渉を見て、駄目だったと思ったが、一応聞いてみた。

「よっ！ どうだった？」

誠は、鼻から駄目だと思っていた。

「まっ！、明日もあるし、気を落とすなよ。」

やっと我に返ったのか、渉がにやけ顔で言った。

「いいって。」

守は、良く解らなかった。

「何が？」

渉は、説明を加えた。

「カラオケ行っても。」

守は、思わず声を大きくしてしまった。

「まさか！」

誠は、守の反応を見て言った。

「ナンパ成功？」

渉に落ち着きが戻ってきた。

「なんか、そうみたい。」

誠は、自分のことのように喜んだ。

「やったな！」

守は、思わずガッポーズを決めてしまった。
「ヨシャー！ 頑張ってこいや。」

第7話 「渉のデート」

渉が、ロビーで待つこと、約20分。

案内係りの女性がやって来た。

「お待たせしました。さあ行きましようか。」

2人は、ホテルから出て歩き出した。

渉は、彼女の和服以外の姿を想像していなかった。

「別人のようですね。」

渉は、彼女の変わりように、びっくりしていた。

束ねていた髪は、綺麗にセットされ、薄いメイクだったのが、きちりメイクされていた。

案内係りの女性は、ニッコリして答えた。

「仕事とオフは、きちり分けることにしてるの。和服はちょっと窮屈で、この格好の方が楽でほっとするの。オフの私を見て、がっかりしましたか？」

渉は、以外にも慣れのせいか先程よりも緊張していない。

「がっかりなんて、とんでもない。とても綺麗です。」

案内係りの女性は少し照れた。

「ありがとうございます。そう言えば、まだ、お名前を覚えてもらってないですね。」

「水越渉って言います。すみません、あなたのお名前忘れちゃって、もう一回、いいですか？」

案内係りの女性は、立ち止った。

「えーっ。私の名前忘れたんですか？ ひどーい。」

渉は、慌てて言い訳をした。

「だって、部屋の案内の時に、チラツと言っただけだから、みんな覚えてないですよ。」

案内係りの女性は、歩き始めた。

「まーね。そんなもんですよね。私、大塚美佳と言います。東郷大3年です。ここの仕事はバイトなの。水越さんは、何をされてる方ですか？」

渉はびつくりした

「えっ？ 大学生なんですか？ 僕は、東京創工大の1年です。」

美佳は、渉の顔を見た。

「1年なんだー。19歳？」

「はい。」

美佳は、ニツコリした。

「2コ下で、未成年かー。」

渉は、もしかしたら、これで終わってしまったかもと、緊張した。

「年下は、ダメですか？」

美佳は、自分が優位な立場にいることを実感した。

「ん〜ん。そんなことないわよ。見た感じ年下だと思ってたし。ほら、着いた。あそこ。」

ちよつと古めの雑居ビルに、明るいい見なれた看板のカラオケチェーン店が入っていた。

2人は、店に入って行った。

店は空いていて、直ぐに案内された。

美佳は、お腹が空いていた。

「何か、頼みましょ？」

涉は、年下として扱われなくなかった。

「うん。じゃー、ビール。」

美佳は、苦笑いを浮かべた。

「エーッ、未成年がいいのかなー。後で何かあると困るから、ノンアルコールにしてもらえると嬉しいんだけど。私は、レモンスカッシュ。それに、お腹空いちちゃったから、ラーメン食べていい？」

涉は、美佳に言われて、素直にビールをやめる気になった。

「うん、いいよ。それじゃー、俺は、ジンジャーエールと、焼き鳥セットにピザと、フライドポテトあんどチキン。他に何かいる？」

美佳は、メニューを閉じて返事をした。

「うーうん、取りあえずは。」

涉は、印象を良くするために、直ぐに電話を取って注文した。

美佳はそれが解ったのか、涉の顔を見て、ニッコリした。

飲み物が直ぐに届けられた。

美佳は、直ぐにでも飲みたかった。

「乾杯しよーよ。」

渉は、何かかつこいい言葉はないか、考えた。

しかし、パツと思ひ浮かばずに、在り来たりになつてしまった。

「それじゃー、2人の出会いに。乾杯！」

「かんぱーい！」

美佳が、カラオケ本を手に取り、渉に突き出した。

「何か歌って！」

渉は、何を歌つたら良いのか悩んだ。

もし、嫌いなものを歌つてしまつて、しらけても困るし。

「どんなのが好き？」

「うーん。何でも好きだよ。」

「演歌とかも？」

「全然オーケー。」

渉は安心した。

「それじゃー、マイケル・ジャクソンのワイアー・ザ・ワールド。」

美佳は、軽くコケた。

「演歌じゃないじゃん。」

渉は、笑いながら言った。

「深く考えないで！。気持ちには、演歌だから……。」

美佳も笑顔になった。

「訳分かんないんだけどー。ウフフツ。」

渉は調子に乗ってきた。

「一緒に歌おう?」

美佳は、ちよつと困った顔をした。

「英語なんか歌えないよー。」

渉は、美佳に近づいた。

「そんなの別にいいって。」

それから2人は、歌ったり、食べたり、楽しい時間を過ごして打ち解けていった。

一方、ホテルに残された2人は、部屋でテレビを見ていたが、誠が突然立ち上がった。

「ちよつと、その辺、走って来るよ。」

守がびつくりした。

「何だよ、突然。こんな時間に?」

誠は、着替えだした。

「もうすぐ、テニスの試合があるからさ。」

守は、テレビから目が離れない。

「泳いだ後なのに、タフだなー。」

誠は、部屋を出ていった。

「じゃー。」

第8話 「真夏の夜の夢」

誠は、ホテルを出て、走りだした。

すぐ前の砂浜をしばらく走ると、あちらこちらにカップルの姿があった。

羨ましいと思う気持ちを抑えて、ひたすら走った。

20分ほど走ると足がかつたるくなかったので、帰りは道路を走ろうと階段を上り道路に出た。

道路を走っていると平行する公園の標示が在り、盆踊りの音楽が聞こえて来たので、少しのぞいてみようと思ふと公園への階段が上がった。

横に広がる海岸線を眺めながら、公園内の道路を走り抜けて、盆踊り広場に出る20段ほどの階段を降りようとした時、階段の途中で座り込んでいる女性が目に入った。

誠は、すぐに駆け寄り声を掛けた。

「大丈夫ですか？ どうしましたか？」

女性は足首を触りながら、下を向いて答えた。

「階段を踏み外してしまって、足首が……。」

誠は心配そうに、足首を覗き見た。

「すごく痛いですか？」

同じ姿勢のまま女性は、答えた。

「立とうとするとすごく痛くて、立てないんです。捻挫だとは思ってんですけど。」

誠は、携帯電話を取り出そうとポケットに手を入れながら言った。

「そうですか。でも、無理すると良くないので、救急車呼びますよ。」

女性は少し慌てて、やめてとばかりに手を振った。

「待って。救急車はいいです。今、携帯でマネージャー呼びますから。」

女性は、座りこんでいるお尻のポケットに手をやり、携帯を取り出した。

携帯電話を見た女性は、思わず声を上げた。

「あーっ！ 割れてるー。大丈夫かなー。」

誠は、携帯電話が壊れるほど強く打ったお尻を心配した。

「お尻は、大丈夫ですか？」

女性は、うつむき加減だった上体を少し起こした。

「言われてみれば、痛くなってきた〜。あ〜っ、携帯もダメみたい。」

誠は、自分の携帯電話を女性に差し出した。

「僕の携帯使ってください。」

女性は、自分の携帯電話を操作をした。

「あっー、アドレス出てこないやー、番号分かんない。どーしよう〜。痛たたっ！」

誠は、仕方なさそうに言った。

「やっぱり、救急車呼びますよ。」

女性は、また、待ってというふうな手振りをしながら言った。

「でも、マネージャーに連絡しないとまずいし。あのー、本当に申し訳ないんですけど、300メートル位先に見えるあのホテルまで、肩を貸してもらえませんか？」

誠は、ちよつと困った顔を見せたが、どうせ身体を鍛えるために走ってるんだから別にいいやと割り切った。

「タクシーも走ってないし、いいですよ。でも、もし骨折でもしていたら大変だし、動かさない方がいいから、おんぶしますよ。」

女性は、うつむき加減だったが、ちよつと戸惑った表情を見せた。

「えっ、おんぶですか？　なんか恥ずかしい。やっぱりいいです。」

誠は、少し声を大きくした。

「何言ってるんですか！　こんな時に。」

女性は、誠の真剣さに負けた。

「そうですね。すみません。痛たたつ。お願いします。」

ずっと、うつむき加減で話していた女性が、この時、顔を上げてはつきりと誠の顔を見た。

誠は初めて、女性の顔をちゃんと見て、ハツとした。

「もしかして鮎川留美さんですか？」

女性は、かくれんぼでもしていて、見つかってしまったような表情になった。

「あっ……、はい。」

誠は、急に緊張して身体の動きが、ギクシヤクした。

しかし、おんぶしなければならぬので、鮎川留美に背中を向けた。

「どつぞ。」

鮎川留美は、誠の肩に手をまわして、背中にしがみつくように動いた。

「はい、すみません。重いですよ。大丈夫ですか？」

誠は、両手を彼女のお尻から太ももに回しこんで、おぶると立ち上がった。

「大丈夫です。普段鍛えてますから。」

そう答えた誠だったが、背中に鮎川留美の身体の柔らかい感触を感じると更に緊張した。

「しっかり、掴っていてください。」

鮎川留美は、痛みを我慢して答えた。

「はい。お願いします。」

鮎川留美は、両手を誠の首に回すと、少し力を入れた。

誠は、緊張しながらも、早足でホテルに向かった。

鮎川留美は、照れながら言った。

「重いでしょ、ごめんなさい。」

鮎川留美の息が首に掛り、ただでさえ緊張していた誠は、声が裏返ってしまった。

「全然大丈夫ですよ。気にしないでください。」

鮎川留美は思わず笑ってしまった。

「ウフフフツ……。」

誠も笑って、ごまかすしかなかった。

「ワハハハッ！」

誠は、こんな2度と無いであろう瞬間を、誰でもいいから写真を撮ってもらいたいと思った。

盆踊りで賑わう広場を通り過ぎる頃、やっと誠の緊張もほぐれて来た。

「今日のステージ、とても良かったです。」

鮎川留美は、少し驚いた。

「えっ！ 見てくれたんですか？」

誠は、鮎川留美が明るい表情をしたのが嬉しかった。

「はい、僕、ファンで、CDとか全部買ってます。」

鮎川留美は、逆に誠が発した聞きなれたセリフが、気持ちを冷まさせた。

「そうなんですか。ありがとうございます。お名前聞いてもいいですか？」

誠は、そんな鮎川留美の気持ちの変化に気が付かなかった。

「野田誠です。」

「後で連絡先とか書いてもらえませんか？」

誠は、舞い上がった。

「はっ、はい。」

誠は、このまま時間が永遠に止まればいいと思う気持ちだったが、現実には足がかなり疲れて来た。

歩くスピードもゆっくりになり、誠の足が悲鳴を上げる頃、ホテルが近くなっていた。

目標が見えると、不思議なもので人間の力は、限界と思っていたと

ころを超えたりもする。というのは、限界と思っていたところが、単に間違いなのかもしれないが、誠は限界ギリギリかそれを超えてホテルに着いた。

第9話 「マネージャーと誠」

誠は、ホテルに入るとそのままエレベーターに向かった。
「何階ですか？」

留美もホテルに着いたことでほっとした声で答えた。
「7階の702号室です。」

誠は、エレベーターに乗った。
「マネージャーは？」

誠が壁にもたれかかったので、留美は少し潰される様な感じになっ
た。

「あっ！ 隣の703です。」

「じゃー、703に行きます。」

エレベーターのドアが開くと、誠は703号室に向かった。

誠は、703号室のドアを少し強くノックした。

「ドンドンドンドン！ ドンドンドンドン！」

中からマネージャーらしき声の返事が有った。

「何ですか？」

20代の女性が、不機嫌そうにドアを開けた。
留美は、思わずマネージャーの名前を発した。

「真紀ちゃん！」

マネージャーの加藤真紀は何か何だか解らなかった。

「留美！ 何してるの？」

留美が、半べそ顔で答えた。

「足、怪我したみたい。」

マネージャーの真紀は、びっくりした。

「中に入って！」

誠は、留美をおぶったまま部屋に入った。

マネージャーの真紀の頭の中はパニックになった。

どれほどの怪我なのか？

いったいこの男は何者？

この男が怪我をさせたのか？

明日の仕事はできるのか？

出来ないなら、いつまで出来ないのか？

ライブのキャンセルは？

関係各社への対応は？

会社の損失は？

社長の怒る顔がちらついた。

マネージャーの真紀は、思わず声を荒げた。

「ベッドに降ろして！」

誠は、言われたまま留美をベッドに降ろすと、横に立った。

マネージャーのまるで犯人を見るような眼と重苦しい雰囲気違和感を感じて、早くこの場から消えたくなっていた。

マネージャーの真紀は痛そうな顔している留美を見ると一層不安に

感じた。

「一体どうしたの？」

留美は、真紀に会えて、ほっとしていた。

「ジョギングしていたら、階段で踏み外して転んでしまったの。携帯も壊れて、足首が痛くて立てないで困っていたら、この方、野田誠さんが通り掛かって、おぶって来てくれたの。ちゃんとお礼してね。」

マネージャーの真紀は、やっと留美をおぶった男がどういう人なのか解った。

「それはどうも有難うございました。後ほど改めてお礼をしたいので、ご連絡先を教えてくださいますか？」

誠は、マネージャーの真紀の急な雰囲気の変わりように戸惑った。
「いいえ、お礼なんて結構ですから。」

誠は、ドアの方に後ずさりしながら、手でいいえのジェスチャーをしたまま、ドアを開けて廊下に出て行ってしまった。
留美は慌てた。

「ちょっと！ 待ってください！」

マネージャーの真紀が、止めようと廊下に出たが、誠の姿は無かった。

真紀は、ため息交じりにつぶやいた。

「あーっ、行っちゃった。」

留美は、どうしたらいいのか考えた。

「そっだ、フロントで聞けば分かるかも。真紀、ちょっと聞いてきて。」

「こんな時間、もう誰もいないわよ。それに迷惑よ。明日にしましよう。それより、足は大丈夫なの？」

留美は、時計を見て納得した。

「ん〜、痛みは弱くなったけど、歩けないと思う。」

マネージャーの真紀は、歩けないと言われたのがショックで、足首を見てみると、かなり腫れていた。

「折れてるんじゃないでしょうね。病院に行かないと！ 救急車呼んだ方が速いわ。明日は、大阪に移動するだけだけど、あさっては、ライブだよ、どうするの？ えーっと、電話、電話。フロントは、9だっけ。」

「こんな時間に迷惑じゃなかったの？」

「ばか、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ。」

マネージャーの真紀は、フロントに電話をすると、ビニール袋に水と冷蔵庫で冷えた缶ビールの缶を入れて縛ると、留美の腫れた足首に当てた。

「ありがとう真紀。やっぱり、頼りになるね。」

「当たり前でしょ！ 私を誰だと思ってるの？ 日本一の歌姫、鮎川留美のマネージャーよ！」

間もなく、赤いランプとサイレンを鳴らしながら、救急車が到着した。

第10話 「土田 守」

誠は、自分達の部屋に戻って来た。夜11時を回っていた。

土田 守が、相変わらずテレビを見ていた。

「おーっ、帰ったか。そんな顔して、何か有ったか？」

誠は興奮気味に言った。

「あー、鮎川留美に会っちゃったよ。」

守は、あまり信じていなかった。

「走りながら夢でも見たんじゃないのか？」

誠は嬉しそうに答えた。

「ホントだって。公園の階段で、コケて倒れてたから、おぶってこのホテルまで運んで来たんだ。」

守は、話にのってきた。

「えーっ！ うそつけ。おぶってなんて、あるはずないだろ！」

誠の顔は、にやけていた。

「そう、信じらんないけど。ちょっと前まで、この背中に、留美ちゃんが乗ってたんだ。」

守は、まだ、100パーセントは信じていない。

「ほんとかよ。そっくりな人とか、背後霊とかじゃないの？」

「鮎川留美ちゃんに間違いないです。ちゃんと確認したし。ここ
の702に泊ってるんだ。」

守は、まだ納得していない。

「そっか。なら写真とか撮ったり、サインとか貰ったんだろ？」

「あっ、忘れてた。」

守は、怪しく思えて来た。

「それで、何のお礼もなかったの？」

「要らないって、連絡先も聞かれたけど、言わずに来ちゃった。」

「ばっ、かだなーお前。本当なら、スゲーチャンスだったのに。」

誠のテンションが下がった。

「やっぱり、メルアドでも交換しとくべきだったかなー。」

守は、誠がへこんだのを見ると、本当の話だと思った。

「当たったり前だろー。二度とこんなこと起きないって。」

誠が、外の音に気付いた。

「あっ！ 救急車の音だ！ きつと、留美ちゃんが呼んだんだ。」

守が、立ち上がった。

「行けば？会えるかもよ。そーだよ、行ってみようぜ。」

誠は、ちよつと困った顔をした。

「でもなー、今さらだし……。」

その時、ドアの音がした。

「帰ったぞー！」

渉の声がした。

守が、興味津々に聞いた。

「おーっ！ どうだった？」

渉は、良くぞ聞いてくれましたとばかりに、口が軽かった。

「それがさー、意気投合しちゃって、一応付き合っことになったよ。」

守は、ちよつと羨ましかった。

「やったなー。」

渉は、調子に乗った。

「まー、本気になれば、こんなもんかな。」

守は、無理に笑った。

「言うね、言うねー。」

渉は、話を続けた。

「それでさー、彼女、東郷大の3年なんだよ。」

守は、座って胡坐をかいた。

「やっぱり、年上かー。」

「でもさー、そんなの全然感じないんだよね。」

守は、興味にまかせて聞いた。

「それで、どこまで行ったの？」

「おー、そこまで聞いちゃう?」

「聞いちゃう、聞いちゃう。」

渉は、得意げに言った。

「最後まで。」

守の目がマジになった。

「ありえねーっの! カラオケ行って、ホテルじゃ、この時間に帰ってこねーっの!」

渉は、笑った。

「はははっ、ばれた? じゃー正直に言うと、キスまで。だけど、そんな所そこのの、ちゅ、ちゅとは、大違い。ながーい、ながーい、デーブなのです。それも、1回じゃない。3回も。どーだ、すげーだろ。」

守は、自慢げな渉が、少し憎たらしくなった。誠の件も羨ましかつたが、ここは、誠の話をして、渉の鼻を折っておきたくなった。

「ほんとかー? キスのやり方知ってんのか? まーいいや。ただ、誠もスゲーこととして来たんだぞ。」

第11話 「恋愛とナンパ」

渉は、喰いついた。

「えっ？ 何、何？ ナンパしてきたのか？」

守は自分のことのように、自慢げに言った。

「聞いて驚くなー・・・あの鮎川留美を、おんぶしたんだぞ。」

渉は、驚いた。

「えーっ！ マジ？ 有りえないしょ！」

誠が、口を開いた。

「マジ。」

渉が、誠に向いた。

「で、何で、おんぶ？」

誠は、少し照れ気味に、ちよつと自慢げに話した。

「それはさー、ジョキングしてたら、公園の階段で鮎川留美が倒れてたんだ。はじめは鮎川留美だと解らなかつただけで、顔を見てびっくりだよ。足を怪我して歩けないって言うから、仕方なくおぶってこのホテルまで運んで来たんだ。」

「ほんとかよー。スゲー偶然じゃん。それで、次会う約束とかしたの？」

誠が直ぐに答えなかつたので、守が言いだした。

「それが、無いんだって。お礼も断って、帰って来ちゃったんだっ

てさ。」

「えーっ！ 何やってんだよ。でも、メルアドくらい聞いたんだろ？」

守がまた、誠より早く答えた。

「忘れたんだと。向こうが聞いて来たのに、言わなかったんだと。」

「信じらんねー。こんなチャンス二度とないのに。」

誠が、言い訳をするように元気なく言った。

「短い時間だったけど、話が出来て、おんぶまで出来たんだから十分だよ。どうせ好きになっても、付き合える訳でもないし、変に引きずるより良い気がする。」

守が、笑った。

「何格好付けてるんだよ！」

渉は、笑わなかった。

「まー、誠の言うことも当たってるかな。芸能人より普通の人の方が無理が無いしな。それに、万が一付き合えたとしても、上手く行く訳ないよ。」

少し暗くなった場の雰囲気を受けようと、守が言った。

「今更何言っても、始まらないさ。気分を変えて、明日ナンパしまくればいいじゃん。」

誠は、ナンパの事など忘れていた。

「ナンパ？ 渉は、するの？」

「する訳ないでしょ、大塚美佳ちゃんに怒られちゃうよ。」

誠が天井を見上げてつぶやいた。

「そっかー、それじゃーあしたは、普通に泳ごうかなー。」

守は困った顔をした。

「2人とも何言ってるんだよ。恋愛とナンパは別だろ？遊びに来たんだから楽しまなきゃ。明日は、俺も頑張ちゃおうかなー。」

渉が突っ込みを入れた。

「由香ちゃんに怒られても知らねーぞ。」

誠も、自分たちが守を誘ったことなど忘れている。

「そーだよ、由香ちゃんみたいなお可愛い彼女が居るのに、ナンパなんておかしいよ。俺なら、絶対浮気なんかしないのに。」

守の声が大きくなった。

「お前ら、一人の女と長く付き合ったことないから、分かんないんだよ。いくら好きでも、毎日毎日一緒に居ると、息抜きしたくなるのさ。お前達だって、好きだからって、毎日毎日焼肉続いたら、ラーメンとか食いたくなるだろ？」

渉は、考えながら言った。

「まーそうだけど。食い物とは、違うんじゃないの？」

誠も続いた。

「俺もそう思うなー。」

守は、自分は経験豊富だと、言わんばかりだ。

「2人とも、まだまだ青いねー。」

「そうかなー？」
渉も誠も、首を傾げた。

第12話 「目的」

次の朝3人は、ホテルの用意された朝食を摂らずに、早々と昨日と同じ海の家にやって来た。

仕切るのはやっぱり、守だ。

「とりあえず、駐車出来たし、場所取りも終わったし、朝飯食いに行こうぜ。」

それならとばかりに、渉が指を差しながら言った。

「あつちに、ファミレス在ったよ。」

歩くこと約5分、3人はファミレスに入った。

7時台にしては、お客が多めだ。

3人共に、モーニングセットを注文して、今日の予定を相談した。

守が切り出した。

「もうすぐ8時だから、人の少ない11時くらいまで泳いで、昼飯食べたなら3時までナンパして、それから帰ろうぜ。」

渉が、直ぐに反論した。

「それじゃー帰り大渋滞だぜ。」

ナンパをしたくない誠も言ってみた。

「じゃー、昼飯食べたなら帰ろう。」

守は、不服そうだ。

「ナンパする時間無いじゃんか。」

誠は昨日の出来事で、ナンパなんかどうでもよくなっていた。

「ナンパなんかしなくていいじゃん。」

守は納得できない。

「また話を戻す。泳ぐのなんて適当にして、今から2時までナンパすればいいじゃん。昼飯なんか、焼きそばか何か適当に食べばいいんだよ。」

渉も、ナンパする気なんてなくなっていた。

「由香ちゃんみたいなお可愛い彼女が居るのに浮気したいなんて、俺もそうなっちゃうのかなー。」

誠は、渉がそんなことを言い出す気持が解って、話に乗った。

「イヤ、俺は、絶対に浮気なんてしないよ。」

守は、絶対と言い切ることが大嫌いだった。

「何事にも、絶対なんて有り得ないね。今彼女が居たとして、もし鮎川留美が付き合ってたって来たらどうする？」

誠は、返事に困った。

「えーっ……だけどそれは、絶対に有り得ない話だし。」

守の顔がマジになっていた。

「今考えたよな。迷ったってことだろ？ もうそれは、絶対なんかじゃないんだよ。それに、絶対にあり得ない話とか言い切れないって。そんなこと言ったら、ジョキングしてて、鮎川留美をおんぶする確率なんて無いに等しいよ。でも、そうなちゃったんだから。」

「それは、そうだけど……。」

考え込んだ誠の間を縫って渉が、言った。

「ほんと、もったいねえよなー。」

守は、ひらめいた。

「そうだ。ファンレターでも出せば、憶えてて返事くれるかもしれないぜ。」

誠は、あり得ないと思った。

「凄く人気あるのに、ファンレターなんて、いちいち読んだりしないよ。」

「ファンを大事にしてるんじゃないか？」

「それはそうだけど、忙しくて読む時間が無いと思うよ。」

守が、じれったくなった。

「終わったこと言っても始まらない。ナンパするべし。」

渉は、目的を達成した気分になっていた。

「やっぱし、俺いいよ。彼女に悪いし。気持ちが乗らないよ。ナンパは気持ちが入らないと絶対に失敗するし。」

守は、一体自分が何のために来たのかを考えると、面白くなかった。

「何言ってるの？ 渉が言い出した旅行なのに。自分が上手くいったからって、終わりじゃー誠が可哀想じゃんか。」

「いやー俺は別にいいし。鮎川留美にも会えたし。」

守は、わざわざ由香に嘘をついてまで来たことが、馬鹿らしく思え

て来た。

「まったく、2人とも何言っちゃってるの？ 俺は、続けるからな！
ナンパしない奴は、電車で帰ってくれよな。・・・ナンパなんて、
もっと気楽に楽しめばいいんじゃないの？ 君たち考え過ぎだつて。」

渉と誠は、顔を見合わせた。

「仕方ない。もう少しナンパしますかー！」

第13話 「ナンパ」

そして、3人は砂浜に戻って来た。

さすが湘南、平日だというのに9時には、かなり人が増えた。

駐車場は、ほぼ満車だ。

守が、獲物を見つけたらしい。

「行くぞ、誠。」

「まじっすか？」

「おー、まじっすよ。ほら、あのピンクの水着の娘。胸でかいし、はい、ご主人様って感じじゃん。ほら、行くぞ。」

誠は、仕方なく守を追った。

「そー言えば、由香ちゃん胸が無かったかー。つまり、男の願望が良心を超えちゃった訳ね。でも、ご主人様なんて趣味有ったんだー。・・・はいはい、行きますよ。」

守は、獲物の前に出た。

「ねー君たち、一緒に遊ばない？」

ピンクの水着の娘とハイビスカス柄の水着の娘は、下を向いたまま守を無視して、避けて歩いた。

守は、再び彼女たちの前へ立った。

「ねー君たち、シカトは酷いじゃん？」

ピンクの水着の娘が、顔を上げた。

「どいてください。」

守はどかない。

「どこ行くの？」

ピンクの水着の娘は、どうやら守が思ったような、ご主人様って感じじゃないようだ。

「うざいんですけど。」

守は、彼女の態度と、自分の感が外れたことでムツとした。

「何だよ、その態度。少しばかり胸がでかいからって、威張ってんじゃねえよ。」

ピンクの水着の娘もさすがに怒った。

「どこ見てんのよ、変態！ 行こう、みどり。」

ハイビスカス柄の水着の娘も、軽蔑の視線を送っていた。

「うん。この変態エロじじー。」

守は、頭に血が上った。

「何だと、このやるー。」

誠は、慌てて守の前に立った。

「ちょっとー、マジ熱くなってどうするんだよ。そんなんじゃ、成功するわけないよ。」

2人の娘は小走りで行ってしまった。

守は、落ち着くなり誠に聞いた。

「なー誠。何が悪かったんだろっ？」

「マジ解ってないんですか？ 胸ばかり見てるからだよ。」

「えっ？ そんなに見てた？ 見てたつもり無いんだけどなー。」

「あの目は、エロい！ 俺でも逃げるよ。」

「ひでーなー。それじゃーあの黄色の2人、行くぞ！」

「待て、守！ 数撃てば当たるつーもんでも無いでしょ。」

「撃たなきゃ、当たんねーだろ。ほら、行くぞ。」

守は、歩いて行く女の子2人の前に立ち塞がった。

「君たち可愛いね。ねえ、どこから来たの？」

「ナンパ？ 間に合ってまーす。」

「ちょっとでいいから、お茶しない？」

「だ・か・らー。趣味じゃないのー。ねー、純子。」

「どこがいけないんだよ。」

純子と呼ばれた女の子が、指を差しながら答えた。

「そのお腹、出てるじゃん。でも、そっちの彼なら、まーいいかな。」

「誠、お前ならいいんだと。何か言ってやれよ。」

誠は、守が悪口を言われたことが、気になって守の見方をした。

「何だよ、お前らだって、足太てーじゃん。」

まさか、誠がそんなことを言うとは思っていなかった守は、慌てて女の子が文句を言うより先に言った。

「おいおい、悪口言っでどーすんだよ。」

「言われて平気なのかよ。」

「初めは、我慢しないと。だいたい、さっきお前が熱くなるなって言っただじゃん。」

純子が、呆れた。

「何ウダウダ言ってるんだか。行こう、幸。」

「うん。バツカじゃないの。」

守は、残念そうに後姿を見ながら、誠に言った。

「ほら、行っちゃったじゃない。純子ちゃんが誠とならいいって言ったのに、もったいないじゃん。案外見た目も良かったしさ。」

「そうかなー？ 初対面で人の悪口言うような奴なんて、僕は全然興味が湧かなかったけど。」

「まー、そう言うなよ。俺、腹出てるし。戻って、一息入れようか。」

第14話 「ナンパの達人」

2人は、水越渉が居るガールズウォッチングポイントへ戻った。

「よっ！ どうだった？」

守は、自分がナンパ下手だと思っていない。

「どうもこうもないよ。ここに来てる女、みんなバカじゃねえの？」

渉が、なぜかナンパの達人のように上からものを言った。

「歩いてる女を狙っても、ダメさ。何か目的があって歩いてるんだから、よほどツボに入らないと、うまくいかねえよ。」

どういうわけか、いつも仕切り屋の守が、素直に渉に聞いた。

「それじゃー、どーすればいいんだよ。」

「寝てる奴を、狙うのさ。それも微妙に、周りを気にしてる女。つまり、待ってそうな女に声を掛ける。これ成功の道なり。」

渉は、この日の為に前もって読んでおいた本の記憶を、鼻高々に紐解いて話した。

「なるほど。でも、水越大先生は、昨日はそんなことしてなかったと思います。」

「ちょっと昨日は、人物重視でどこまでやれるのか、試してたのさ。成功すれば誰でもいいって訳じゃないからね。」

守が渉の講義に感心しているとき、誠が指を差して言った。

「あそこの2人は、そんな感じに見えるけど。」

守が、目を凝らした。

「どれ、どれ。おー、なるほど。でも、ちょっと、けばくない？」

渉が一括した。

「もう今日は、選べる立場じゃないっの。どーせ断られる可能性が高いんだから、練習、練習。」

「分かった！ 行くぞ、誠！」

「えーっ！ 俺？・・・行くの？ 俺はいいよ。好みじゃないよ。」

「何言っただよ。人は外見じゃないよ。それとも電車で帰るのか？」

「電車って、えーっ、参ったなー。外見を一番気にしてるのは誰だよ。」

「いいから、来いよ。遊びなんだから。お前だって、ナンパで恋人が出来るなんて、本気で考えてないんだろ？」

「はいはい。仕方ないかー。」

2人は、黒色のビキニに金のアクセサリを身に付けて、パラソルの下でうつ伏せに寝て雑誌を見ている2人の所に近寄った。

誠が認める守の凄いところは、誰にでもちゅうちよなく声を掛けられるところだった。

「ねえ、君たち一緒に遊ばない？」

誠は、がっくりした。守は学習というものをしないのかなっと思っ

た瞬間、驚いたことに一人の女性Aが普通の返事をした。

「何して遊ぶの？」

守は、今までの人とは雰囲気が違う対応にちよつと動揺しながらも言った。

「ビーチバレーとかさ。」

隣にいた女性Bが、答えた。

「なんか、かつたるいな。」

「身体動かすと気持ちいいよ。」

女性Aが手を振った。

「疲れるから、いいや。バイバイ。」

「そんなこと言わないで、遊ぼうよ。」

女性Bが、聞いてきた。

「お金有るの？ 仕事何してるの？」

「金なんて大して無いけど……。まだ大学生だし。」

「なんだ、大学生か。お金無いなら、遊べないじゃん。」

女性Aが起き上って座った。

「見て解らないかしら？ わたしら、お水よ。お金無い人とは、遊ばないの、バイバイ。」

守は、ハツとした。

「キャバ嬢か。行くぞ、誠。」

守は、何のちゆうちよもなく渉の居るポイントに歩き出した。

誠は、金持ちの守が、何でそんな対応を取ったのか不思議だった。

「守、何で、あっさり引き下がったの？どうせ遊びなんだから？別にいいじゃんか。」

「あのさー、あいつらは、プロだよ。痛い目に会うのが落ちだよ。金なんかいくら有っても足りないさ。」

「へーっ、そんなものかなー。女好きの守が言うんだから、当たらずも遠からずだな。」

守と誠は、渉の所に戻った。

戻るとすぐに、守は渉にうっぶんをぶつけた。

「何だよ、キヤバ嬢だったぞ。お前の言うこともあてになんねーじゃん。」

「そんなことねえーよ。見れば分かるじゃん、ケバイもん。前に痛い目に有ったからって毛嫌いすることないじゃん。良い人だっているかもよ。でも、待ってたのは当たってたたる？」

「まーな、確かに。黒に金色は、俺達の趣味じゃなかったただけかな。」

誠は、もう嫌になっていた。

「守、もう、やめようよ。疲れたよ。普通に泳いで遊んだ方がいいよ。」

「確かに、疲れたな。誠が良いなら、もういいっか。」

渉が、にやけた。

「やっとな気が付いたか。」

守が涼しげな渉に言い返した。

「言い出しつぺのくせに、自分が成功したからって、上から目線かよ。」

誠が、海を指差した。

「いいから、泳ごうぜ。」

第15話 「運命の出会い、それとも逆ナン？」

誠が、海に歩き出すと、渉が立ち上がって続いた。

仕方なさそうに、守が大きなドーナツ型の浮き輪を手にして、後を追った。

誠は、海に入ると、スイスイと泳ぎ出した。

渉も、すぐに誠の後を追った。

誠は大きな声を出した。

「気持ちいいー。やっぱ、海に来たら泳がないとなー。」

泳いでいると、渉は素直な気持ちになった。

「ナンパ付き合わせて、俺だけうまく行って、悪かったな、誠。」

「別に気にしてないよ。案外楽しかったし、鮎川留美と会えたし。」

いつの間にか、すぐ後ろに、浮き輪に入ってバタ足をする守が居た。

「なんか俺だけ、いい思いしてないんだけど。どうしてくれますかー。」

「由香ちゃんみたいな可愛い彼女が居るのに、浮気しようとするからな。」

日頃から、由香が可愛いと密かに思っていた渉が言った。

「また、その話かよ。遊びに来たんだからそれはなしだって。次来た時は、作戦をもっと考えておいて、ナンパを成功させてやるよ。」

3人は、20分ほど泳いで砂浜に上がって来た。

その時、渉と話しながら歩いていた誠は、横から女の子がぶつかって来た。

女の子は、仲間とビーチバレーを楽しんでいて、夢中でボールを追いかけて、上空のボールを見ながら斜め後ろ向きに走り、背中から誠にぶつかった。

女の子は慌てた。

「イテテッ。ごめんなさい！ 大丈夫ですか？」

「うーん、大丈夫みたい。・・・アツ！」

誠は、そのままうつ伏せに倒れてしまい、彼の背中には、女の子がうつ伏せにきれいに乗ってしまったていた。

気付いてみると背中に、柔らかい感触を感じて、鮎川留美をおぶった感覚が甦ってきた。

女の子は、恥ずかしそうな表情をしながらも、砂に手を着き、ゆっくりと立ち上がった。

誠の脳は、昨日の記憶をたどって、人が思い出し笑いをするようにニンマリした笑顔のようになっていた。

丁度その時、誠は立ち上がった女の子を見て、顔がニンマリしたように見えてしまった。

「あーっ、なんか、いやらしいー！」

女の子は、誠の顔を見て言った。

誠は、ハッと我に返った。

「違う、違う。そんなんじゃないって！」

「別にいいですよ。私からぶつかったんですから!」

「でも、本当にそんなんじゃないんです。ちょっと昨日の事を思い出しちゃって。」

「そうですね。ずいぶんと変な時に思い出すんですね。」

座り込んでいる誠に、女の子が右手を差し伸べた。

「ありがとう。」

誠は、その手を握り、立ち上がった。

「ねーっ!一緒にビーチバレーやりませんか?3人でしょ?

私達も3人だから、混合で3チームできるじゃないですか。ネーッ、美樹、知佳、いいよね?」

横に来ていた、上野美樹と井上知佳が、うなずいた。

すると土田守が、待ってましたとばかりに、前に出て来た。

「いいね、いいね。やるうよ。俺、土田守、よろしく。」

誠と手を握って立っている女の子が、誠を見ながら口を開いた。

「橘みずきです。よろしくね。」

水越渉が、守の後ろから前に出た。

「あーっ、俺、水越渉、よろしく。・・・誠、いつまで、手繋いでんだよ。」

橘みずきが、慌てて繋いでいた手を離した。

誠は、手を離されたので、橘みずきの顔を見た。

「僕は、野田誠です。よろしく。」

守が、早速仕切り始めた。

「そっちの2人は？ どっちが美樹ちゃんでー、どっちが知佳ちゃんかなー？」

浮気が嫌いだっただはずの渉が、しゃしゃり出た。

「待って、待って。俺当てる。・・・うーんー、こっちが知佳ちゃんで、そっちが美樹ちゃん。」

「はずれー！ 私が美樹で、そっちが知佳ちゃんでーす。」

「なーんだよ、どー見ても、知佳って顔してんじゃん。」

井上知佳が反応した。

「えーっ？ どういうことですかー。」

守は、井上知佳が好みのようにだ。

「そんな奴、相手にしない方がいいよ。俺と組もうぜ。」

上野美樹は、守が好みだったようだ。

「あーっ。私が組みたかったのになー。みずきは、野田さんで決まってるし。」

しょうがない、水越さんでいいや。」

大塚美佳のことがすっかり頭から消えていた渉は、そう言われては黙っていられなかった。

「おーっ。しょうがない、水越さんでいいや。とは、何だよー！俺だって知佳ちゃんの方が良かったな。」

上野美樹も、自分の失言とは解っていて、ムツとした。

「あーっ！ 顔で区別したでしょ。どーせ、知佳もみずきも私より可愛いですよーだ。」

「違うって！ 美樹ちゃん。声、そう、声が、知佳ちゃんの声が、好みなんだよ。」

上野美樹は、本気で怒っているようではないようだ。

「ごまかしても、もう遅いですよーだ。ウッフー！」

「参ったなー。それじゃー、俺と組んでください。」

「お願いされれば、仕方ないかー。」

第16話 「ビーチバレー」

守が、完全に仕切り始めた。

「決まりだね。じゃー、コート書こうぜ。ネットは、無理だから無しだね。」

渉が異議を申し出た。

「無しって？ それじゃーメチャクチャになって、試合になんないよ。」

守がひらめいた。

「そーだ。海の家に、柱になりそうな棒とピンクのナイロンひもが有ったよ。」

「ちよつと見てくる。」

守は、駆け足で海の家に行った。

海の家に入るとすぐに、棒とひもを抱えて戻って来た。

「ちよつと低いかもしれないけど。」

橘みずきが、守の姿を見た。

「いいのが有ったじゃん。低い方が面白いかも。」

誠は、みずきに良く思われようとしている訳ではないが、話を合わせてしまう。

「そうだね。これは使える！ 手伝うよ。」

守と誠が、棒を砂に叩き込んで、ナイロンひもをネット代わりに3回往復させた。

2人がネットを作っている間に、渉が棒を使って、適当に線を引き始めた。

「ちつと曲がったかな？」

上野美樹が大きな声で言った。

「上等、上等。」

井上知佳も、元気に言った。

「いいじゃん。いいじゃん。やる気出て来た！」

守が、時間を気にした。

「それじゃー総当たり戦で。」

最初は、野田誠・橘みずき組と土田

守・井上知佳組。」

思わず誠が声を出した。

「えっ？」

守に聞こえた。

「えっ？って何だよ！ お前が一番うまいくせして。」

知佳が意外な顔をした。

「そうなの？ 土田さんが上手いのかと思ってた。」

守は、上機嫌だ。

「俺が上手そうに見えた？ うれしいねー、頑張っちゃうよ！」

みずきが、誠に向かって聞いた。

「野田さんって、うまいの？」

誠は、いつも控えめだ。

「そんなことないよ。」

渉が口を挟んだ。

「こいつは、テニスがうまいの。バレーは、俺。」

みずきは、渉が自慢げに言ったのに、気になったのは、誠のことだった。

「えっ？ テニスうまいの？ 私たち3人、テニス部なんだ。」

渉は、アレ？そっち？と思いつつも、誠のことを言った。

「誠は、高校の時、県代表だよ。」

みずきは、興奮した。

「すごい！ ねー今度、テニス教えてください。」

守が、口を挟んだ。

「君たち、高校生？」

知佳が答えた。

「そう。高3。土田さんたちは？」

「高3かー。俺達は、東京創工大1年。」

「そうなんだー。年近いんだ。」

渉が、審判になった。

「さー、やろつぜ。守と誠、じゃんけんして。」

「始めは、グー、じゃんけんばー」

渉が審判らしく言った。

「はい、誠の勝ち、どうする？」

「そりゃー、サーブでしょ。」

守が眩しくない方を指差した。

「じゃー、こっちのコート。」

みずきがコートに入り、誠に向かって言った。

「野田さん、勝ちましようね！」

負けじと、知佳も守に言った。

「土田さん、ファイト！」

第17話 「プレイボール」

渉が、言い切った。

「それじゃー15点先取。サーブ権はなしだよ。」

知佳が納得しなかった。

「えーっ、何それ？普通は9点先取の3セットでしょう？ラリーポイント制は良いけど。」

渉は、反論が有ったのに、更に短くして、強引に始めようとした。

「それじゃー時間かかるから、10点先取で決まり。プレイ！」

知佳は文句を言いたげだったが、他の者たちは気にしていなかったので、そのまま試合が始まった。

笑顔と笑い声が絶えない前半だったが、6対4でコートチェンジを行った時から、ムードが変わった。

8対5。野田誠・橘みずき組が先行していた。

橘みずきのサーブが、ヨロヨロと青空に上がった。

井上知佳が、ボールの下へ入って、奇麗にレシーブを上げ、土田守の待つネット際へ飛んだ。

土田守が、ジャンプをして、アタック！

鋭く決まるはずのボールは、野田誠のブロックに跳ね返されて、井上知佳の右前に落ちた。

9対5。マッチポイント。

速いサーブが太陽と重なり、レシーブエラー。

渉が声高らかに、ゲームセットを告げた。

「野田誠・橘みずき組の勝ち。さあー、上野美樹ちゃん、やるぞー！」

美樹が少し呆れ気味に呟いた。

「マジ強くなあーい？ あんなのに勝てる訳無いしょ。」

そして、上野美樹の言うとおり、試合は簡単に終わった。

美樹が肩を落とした。

「あーあつ、やっぱり負けちゃった。水越さん、バレーは上手いんじゃないの？」

渉は苦笑いしながら答えた。

「おー、白鳥の湖はな。誠ちゃん、本気出すなよ。俺の立場ないじやん。」

誠は、昔からどんな勝負事も負けるのが嫌だった。

「別に、本気出してないけど……。」

「そこまで、言うかつーの！」

美樹が、笑っている知佳を見た。

「水越さん、知佳組には勝とうね。」

「よしゃー、守には、勝つてやる！」

土田守・井上知佳組と水越 渉・上野美樹組の試合が始まった。

始めのうちは、土田守・井上知佳組が、立て続けにポイントして、5-0。

渉が、ネット越しに守に話しかけた。

「少しは手加減しろよ！ゼミの課題見せてやらねーぞ。」

「何言つてんだよ。そんなの頼んだことあったけ。」

「そんなこと言っちゃって、後で困つても知らねーよ。」

「今は、ゼミなんて関係ないしー。もう飯奢ってもらえなくてもいいのかなー。」

このつまらない会話から、なぜか、流れが変わった。

このまま負けると思われた水越渉・上野美樹組が、慣れてきたせいなのか動きが良くなり、5・6まで巻き返した。

交互に得点し、緊迫したシーソーゲームとなり、土田守・井上知佳組9・8のマッチポイント。

渉が、またネット越しに守に話しかけた。

「ねえー守、試合を楽しくするには、デュースにした方がいいと思うよ。」

「悪いねー、腹が減って早く決めたくなつたよ。」

守の強烈なアタックが、決まった。

腹の減った誠が試合終了を告げた。

「はいはい、ゲームセットね。時間掛かり過ぎだよ。」

守もそーとう腹が減っていた。

「何か食おうぜ。」

そこへ橘みずきが、両手を振りながら言った。

「ダメダメ！ 私達と試合してから！」

守が、そんな馬鹿なといった表情で聞いた。

「えっ？ やるの？ 誠が勝つに決まってるじゃん。」

美樹は、譲らない。

「そんなのやってみなきゃ分からないわよ！」

みずきより私の方が運動神経良いし。」

「分かった。やろう！」

誠の発言で決まった。

すぐに試合が始まった。

不思議と土田守・井上知佳組が、3点連取した。

思わず渉が、大声を上げた。

「誠、何やってんだ！」

知佳も力が入っていた。

「守さん、ナイスプレイ！」

野田誠・橘みずき組が得点すると、土田守・井上知佳組も負けじと得点して、

8-7とリードを保っていた。

誠は、義理人情に厚かった。

彼の家は裕福ではなく、大学の授業料を支払うので精一杯で、彼はバイトをして家賃や生活費を稼いでいたが、いつもギリギリで遣り

繰り返していた。守はそんな誠にも、食事と一緒に遊ぶ時などの代金を全部負担していた。

守は、誠の気持が解っていた。

「誠、遠慮しなくていいぞ。これは、遊びだし。」

「でもさー。」

井上知佳は、誠が遠慮していたなんて気が付いていなかった。

「えっ？ そうだったの？ 情け無用よ！ 来い！」

誠は、知佳に言われたので、続けて打ちこんでみた。

8 - 10。あっさり、逆転で終わった。

橘みずきは、こぶしを突き上げて喜んだ。

「やったー、優勝、優勝。」

井上知佳が、残念そうに呟いた。

「だって、野田さんが、上手いんだもの。」

上野美樹も悔しそうに言った。

「そうよ、私も野田さんと組んでたら、勝ってたわ。」

水越渉が、皮肉たっぷりに言った。

「下手ですみませんでしたねーだ。」

土田守が、場の雰囲気を変えようとした。

「さあー、何か食おうぜ。」

まっ先に上野美樹が、反応した。

「賛成！」

井上知佳が雑誌で得た情報を披露した。

「向こうに在るお店が、スパゲティとカレーが美味しいらしいよ。」

水越渉は、人に勧められると直ぐに反応するらしい。

「行こう、行こう。」

第17話 「プレイボール」(後書き)

お読み頂きありがとうございます。

次回より、更新は毎週土曜日20時となります。

第18話 「雑誌に載ってる飲食店」

6人は、水着の上にTシャツやパーカーなどをはおり、ダラダラ歩いて店までやって来た。

まとめ役になった感じの土田守が、みんなに聞いた。

「何食う?」

橘みずきは、誠に合わせたい様な気持になった。

「野田さんは?」

野田誠は、自分がみずきに聞かれるとは思っていなかったの、戸惑った。

「えっ? 俺。そーだな……。ビーフカレーにしようかな。」

橘みずきは、笑みを浮かべて、すぐに言った。

「私も、ビーフカレーにしようつと。」

上野美樹は、みずきと出かけると昔から同じものを頼んでいた。今日もの習慣に合わせた。

「私も!」

井上知佳は、雑誌には、スパゲティとカレーが美味しいお店と紹介されていたので、どちらかにしようとしていたが、みずきも美樹もカレーなので結局、同じ物にした。

「私も、ビーフカレー!」

土田守は、3人が誠に合わせたように見えて、ちょっと面白くなかった。

「何それ。じゃー俺は、かつ丼。」

「えっ！ かつ丼なんて有るの？」

井上知佳が、思わず声を上げた。雑誌には、スパゲティーとカレーが美味しいお店と紹介されていたので、意外に感じたのだった。

土田守が、メニューを指差した。

「ほれ。」

井上知佳が、覗きこんだ。

「あつ、有る。ハンバーグやステーキも。チキングリルや竜田揚げも。海老フライやコロッケにラーメンまで、ファミレス並みに有るよ。」

水越渉は、一瞬、守に付き合おうかとも思ったが、どうせならと、もうひとつの看板料理スパゲティーにした。

「俺は、カルボナーラ。」

注文した物が、直ぐに運ばれて来た。

あまりの早さに、みんな、びっくりしたようだったが、すぐに食べ始めた。

カルボナーラを食べていた水越渉が呟いた。

「美味しいよこれ。ちゃんとパンチエッタが入ってる。」

土田守が、渉に聞いた。

「何だよ、パンチエッタって？」

「このことだよ。生ベーコンとでも言うのかなー。」

「意外だなー、スパゲティーに詳しくあったんだー。車にしか興味な

いのかって思ってた。」

「このくらい、みんな知ってるよ。」

カレーやかつ丼は量も少なめで、特別美味しいという訳では無かったが、知佳の手前、みんなは、「美味しかった。ご馳走様。」とたいらげた。

一息ついたので、例によって土田守が、口を開いた。

「君たち、どこから来たの？」

橘みずきが、普通に答えた。

「横浜。」

土田守が、しめたとはいたげに返した。

「横浜！ 俺達もそっちの方向だよ。それじゃー帰り、乗せてってあげようか？」

橘みずきが嬉しそうに聞いた。

「車で来てるんですか？」

「うん、うちの車。ワゴンだからみんな乗れるよ。」

水越渉が、補足した。

「こいつんち金持ちだから、いい車乗ってんだ。運転はへたくそだけどね。」

土田守が嫌そうな顔をした。

「余計なこと言うなよ。怖がって乗らないよ。」

「そつか。それじゃー・・・へたくそじゃなくて、免許取ったばかりでヨロヨロ運転してるだけってところかな。」

土田守は、涉が余計な事を言った事で、彼女達の顔の表情を気にした。

「そんなに酷くないから、大丈夫だよ。」

みんなが苦笑した。

「ウフフツツ・・・。」

土田守は、気を取り直してにこやかに言った。

「みんなもう泳がないだろ？ 早めに出ないと渋滞するし。」

上野美樹が、同調した。

「そうね。曇って来たし。」

橋みずきは、昔からの付き合いの中で、美樹との話のタイミングを持っていた。

「疲れたしね。帰ろう。」

まとめ役らしく、土田守が仕切った。

「それじゃー、着替えたら、さっきビーチバレーしてた所集まることにしよう。」

井上知佳が、土田守に向けて、両手の指でOKサインを出した。

みんなが、それを見て、声にした。

「オーケー。」

みんなレストランから出ると、海の家に戻った。

第18話 「雑誌に載ってる飲食店」(後書き)

お読み頂きまして、ありがとうございます。更新は、毎週土曜日20時とさせて頂いております。

第19話 「更衣室のおしゃべり」

女子更衣室では……。

上野美樹は、橘みずきとは幼馴染で、お互いのことを良く理解していた。

「ねえーみずき。野田さんのこと本気で気に入ったみたいだね。」

「分かつちやった？」

「当たり前じゃない。あれだけくつついてれば見え見え。野田さんは私のもの、美樹や知佳は手出さないで！って、言っているも同じ。」

「えへへっ。そんなつもりは……、ありましたー!!」

「あーっ、やっぱり。私も、野田さんがいいかなーと思ったんだけど、みずきを見てたら別にいいかーって感じ。次に土田さんと思っただけど、知佳が気に入ったみたいだし、3対3だったから、丸く収まろうかなって水越さんに。」

橘みずきのほほがほんのりと赤くなっていた。

「えへへっ。気を使ってもらって、めんぼくねーっ。グフフッ。」

井上知佳が、話し始めた。

「私はどうでも良かったからいいんだけど、土田さんが私を気に入ったみたいで、やたらと話しかけてくるんだよね。少し強引なところもあって、嫌いなタイプじゃないから、まっ、いいっかって感じ。」

上野美樹が、突っ込みを入れた。

「え〜っ。それじゃー言い寄って来たら、付き合っ気有るんだ？」

「ん〜、まあーね。」

「参ったなー、冷めてるのは私だけか。」

橘みずきが、上野美樹に少し気遣った。

「この際だから、水越さんと上手くやってみれば？ いい人に見えるよ。」

井上知佳も、いつもと違う上野美樹を気にしていた。

「水越さんの目は、美樹に一目惚れしましたーって言うておりました。」

上野美樹は、2人の気持が解った。

「はいはい、ご心配どーも。」

男子更衣室では……。

土田守が、うらやましそーに言った。

「誠って、案外人気あるんだなー。少し積極的になれば彼女なんてすぐにできんじゃないの？橘みずきちゃんなんで、そばから離れないし。付き合っちゃえばいいのに。」

「う〜ん、ま〜ね〜。」

水越渉が誠の顔色を見て言った。

「気乗りしてない感じだね。そーか、鮎川留美のことが頭から離れないんだな。」

土田守がアドバイスのつもりで言った。

「でも自分から連絡先を言わないで諦めたんだから、もう考えるのはやめて、この現実のチャンスをものにしろよ。」

水越渉は、橘みずきが気に入っていた。

「橘みずきちゃんだって、可愛いよ。どことなく鮎川留美に似てねえ？」

土田守がすぐに共感した。

「俺もなんかそんな気がしたんだ。誠は？」

「そーかな？ 留美ちゃんの方が、圧倒的に可愛いけどねー。」

水越渉は、分析した。

「それは、プロが化粧してるし、芸能界で磨かれてるからねー。」

土田守が更に、付け加えた。

「それは言える。スタイリストやプロのメイクさんが付いてるんだろーし。スッピンだと、案外、みずきちゃんの方が可愛いんじゃないの？」

野田誠は、こうと思うと客観的に物事が見れないことが有る。

「お前ら、目、おかしんじゃないの？」

水越渉がちよっと本音を漏らした。

「彼女が、誠のこと好きでないなら、俺が取っちゃうところなんだけどな。」

土田守も同じことを思っていた。

「ハハハッ。それは無理だな。俺が頂く。」

水越渉が、知佳ちゃんの方に話をそらした。

「守は、井上知佳ちゃんと上手いこと行ってんじゃないの?」

「橘みずきちゃんが、誠に向いてたから、ああなっただけ。渉が知佳ちゃんのこと気に入ってるんだったら、別にいいぜ。」

「いや、俺も別にいいや。」

「そっかー、ビーチバレーのチーム決めの時、知佳ちゃんの方がいいようなこと言ってたからもしやと思っただけど、渉も役者だなー。で、結局、誠だけが上手くいった訳だ。でもこれで、2人に彼女出来そうじゃん。旅行の目的達成ってとこかな。」

水越渉が、勝手な想像を始めた。

「上野美樹ちゃんが、言い寄って来たらどうしようかなー。」

珍しく野田誠が、人のことに発言した。

「大丈夫、それは無い。はたから見て、仕方なくペア組んでるの見え見えだから。」

「おー、言ってくれるね。いいもん、俺には、美佳ちゃんがいるんだからさ。」

水越渉の言葉で、土田守が急に案内係の大塚美佳のことが気になった。

「そう言えば、美佳さんから連絡来てるのか?」

「ない。きつと、バイトが忙しいんだよ。」

土田守が、ちよつと構った。

「そーか？ 忘れられてるんじゃないの？」

野田誠は、たまに冗談かどうか解らないことを言う時がある。

「キスマでして、忘れるわけ無いじゃないですか。好意が有るなら、メールの一つくらい送ってきますよ。一夜の退屈しのぎ、きつと、遊びだったんですよ。」

土田守が、笑った。

「言うね、言うね。誠さん。渉君、やばいんじゃない？」

水越渉も、苦笑い。

「誠も言ってくれるよな！。心配している事をグサリ。」

第19話 「更衣室のおしゃべり」(後書き)

お読み頂き、ありがとうございます。更新は、毎週土曜日20時です。

第20話 「帰りの席順」

男子達が集合場所に戻った。

30分遅れて、女子達が現れた。

上野美樹が、男子を待たせていたことを悟って、苦笑いを浮かべながら、先頭でやって来た。

「ごめん、待った？」

土田守がにこやかに答えた。

「全然。」

水越渉が、ちよつと大げさにおどけた。

「おーっ！ 水着も良かったけど、これもまたいいね！」

土田守も、お世辞気味の発言を試してみた。

「とても高校生には見えないな！。どこかのモデルさんですか？」

水越渉は、割と細かいところまで良く見ている。

「みんな、さつきと化粧も違うよね？」

井上知佳は、自分が化粧で一番変わると思っている。

「さつきは、泳いだりしてるし、それ用のメイクだから。」

土田守も、話を合わせた。

「アスリートメイクとホリディメイクだね。随分と変わるもんだね。」

井上知佳は、野田誠が気になっていた。

「野田さんが、みずきをじっと見てる！」

野田誠は、慌てた。

「違う、違う！ ちらっと見たただだよ！」

井上知佳は、誠の表情が面白かった。

「あーっ、むきになってるー。」

上野美樹も、参入してきた。

「野田さん、みずき、可愛いでしょー。野田さんの為に、一生懸命にメイクしてたんだから。」

橋みずきは照れて、美樹のスカートを引っ張った。

「もー、何言ってるのよ！」

水越渉は、上野美樹をちよつとからかいたくなった。

「美樹ちゃんも、すごーく、かわいいよ！」

意外な言葉に、上野美樹は、みずきの倍ほど照れまくった。

「えっ？ 何、何言っちゃってるのよ！ もー、どうしていいか、解らないじゃん！」

水越渉も、ちよつと意地悪だ。

「ほんとに、そう思ったから。僕には、一番可愛く思えるよ。」

土田守も、これでは井上知佳がいじけると思い言ってみた。

「知佳ちゃんだって、可愛いよ！」

井上知佳は、クールだった。

「手遅れです！ 無理しないでいいです！」

「違うって！　ほんとだって！」

「ハハハッ！　ありがとう、ありがたーく、受けとっておきます！」

「参ったなー。そうじゃなくて……。」

橘みずきが、ちよつと飽きた。

「さあー、行こうよ！　遅くなるよ！」

土田守は、みずきの発言に救われた気がした。

「そっだ、出発、出発！」

6人は、駐車場に歩き出した。

土田守は、どこに行けばいいのか聞いてみた。

「横浜駅でいいのかな？」

橘みずきが、答えた。

「最寄駅は、京浜急行の能見台駅なんですけど、大丈夫ですか？」

「いいよ、分かるから。」

橘みずきが、知佳と美樹に小声で話し始めた。

「知佳、美樹。どうする？」

聞かれた上野美樹が、いつも頼りになるみずきに聞き返した。

「みずきはどっ思っっ？」

橘みずきが、顎に右手のこぶしを当てて考えると答えた。

「んー、私は大丈夫だと思うけど。」

3人の様子を見ていた水越渉が、3人に向かって、相談を遮るよう
に少し声を大きくして言った。

「もしかして、俺達、信用されてない？」

3人が何を相談していたのか、さっぱり分からなかった土田守が、
渉の一言でどうということなのか気がついた。

「そーいうことか。それなら、全然大丈夫。変なことしないから。」

井上知佳が、喰いついた。

「始めから、変なことするって言う人は居ないでしょ？」

「そーだけど。今さら、なんだよ。」

「仕方ないじゃん。今そう思ったんだから。」

「俺達は、絶対だいじょーぶ！ 人相見れば解るじゃん。」

上野美樹は、曖昧な土田守の言葉なんか耳に入らなかったが、何か
ひらめいたように言った。

「そーだ。東京創工大でしたよね。学生証か免許証の写真撮らせて
よ。」

土田守が、その手が有ったと、感心した。

「えー、個人情報だからなー。・・・冗談。いいよ。渉も誠も出せ
よ。」

水越渉は、海水浴の目的を忘れていなかった。

「一方通行じゃな。君たちのメルアドや番号も教えてくれなきゃな。」

上野美樹は、自分が言い出したことだったので歯切れ良く答えた。

「いいですよ。知佳やみずきもいいでしょ？」

井上知佳と橘みずきは、美樹に聞かれたので、半分弾みで返事をした。

「いいよ。」

みんな、ポケットや鞆から携帯電話を取り出して、メルアド交換が始まった。

水越渉が学生証を出すと、上野美樹がすぐに反応した。

「免許証の方がいいな。」

水越渉が、面倒くさそうに言った。

「何でだよ。」

「ん、住所が無いんだよね。」

水越渉は、面倒くさそうに免許証を出した。

「別にいいよ。ほれ。」

橘みずきは、美樹をまねてみた。

「ねえねえ。野田さんは？」

野田誠は何も考えずに普通に答えた。

「俺、免許証持ってないよ。」

橘みずきは、がっかりして溢した。

「そうなんだー。」

みずきのがっかりした顔を見て、美樹が誠に言った。

「ねえー、野田さん。あなただけ住所が解らないんだけど。」

「あつー、それなら、守と同じだよ。守の家のアパートに住んでるから。」

女子3人が口を揃えて言った。

「うっそー、そうなんだー。」

そこで、土田守が聞かれてもいないのに、元気良く言った。

「俺は免許証有るよ！」

井上知佳は、土田守の出した免許証を受け取りながら、にこやかに答えた。

「知ってるよー、危ない運転してるんでしょ。うふふっ。」

水越渉は、車に乗ろうとしたが、ふと考えた。

「席はどうしようか？」

井上知佳が、気を使って言ってみた。

「みずきが、野田さんと一緒にいいって！」

たまらず、みずきが、言った。

「ちよつと！ もう止めてよ、野田さんだって迷惑だから。」

井上知佳は、悪びれた感も無く聞いた。

「そうなんですか？ 野田さん。」

「別に、迷惑なんか……。」

「じゃー、野田さんは、みずきと一番後ろの席でイチャイチャしてください。」

橘みずきは、声を大きくした。

「ちょーっと！ 何言ってるのよ！」

水越渉は、誠と橘みずきが一番後ろの席なら、当然その前の席は、自分だろうと思って言った。

「真ん中の席は、俺と美樹ちゃん……。美樹ちゃんいいよね？」

ところが上野美樹は、本音が出てしまった。

「えっ？ 知佳と二人がいいなー。」

土田守は、ためらいも無く、あっさり言った。

「じゃー、前は、俺と渉。さあー乗って。」

「ちょっとー、守。」

「乙女心、感じるよ。」

上野美樹が、思わず声を上げた。

「土田さん、すてきー。」

水越渉が元気なく言った。

「仕方ないかー。知佳ちゃん、いつでも換わるからね。前に来たくなったら言っつてね。」

「はい！ 大丈夫です！」

土田守が、エンジンを掛けた。

「さあー、出発するよ！」

第20話 「帰りの席順」(後書き)

お読み頂きありがとうございます。更新は、毎週土曜日20時となります。

第21話 「隠し事」

皆を乗せたワゴン車は、能見台駅へ向かって走り出した。

水越渉が、カーナビのセッティングを始めた。

「混んでないといいけどね。」

土田守が答えた。

「それは、無理でしょ。天気も良かったし。」

橘みずきが、2人の会話に割って入って来た。

「朝早くから来てたんですか？」

みずきの声にいち早く反応して、守が答えた。

「きのうから。父親の病院の福利厚生で契約しているサン・パシフィックホテルに一泊したんだ。」

井上知佳は、昔から聞きたいことは直ぐに聞く。

「お父さんの病院って、病院の経営者なんですか？」

「そうだけど、大した病院じゃないよ。」

水越渉が、横槍を入れた。

「何、謙遜してんだよ。結構でかいじゃんかよ。」

井上知佳は、俄然興味が出て来た。

「すごい！でも、土田さんは医学部じゃないですよね。病院を継がないんですか？」

水越渉が、また横槍を入れた。

「二男だし、勉強できないから、医者にはならないんだってさ。」

井上知佳は、少しがっかりしたような感じだった。

「そーなんですか、何だかもつたいないですね。」

上野美樹は、目標を持っている人が好きだ。

「で、他になりたいものがあるんですか？」

土田守は、美樹の期待した返事は出来なかった。

「今のところ、特に見つからないんだよね。」

水越渉は、このままでは自分の事も色々聞かれると思い、話を戻した。

「君たちは、今朝来たの？」

3人で一番初めに話し出すのは、だいたい上野美樹だ。

「さっき聞いてびっくりしたんですけど、私たちもサン・パシフィックホテルに泊ったんです。鮎川瑠美さんを見に来て……。」

橋みずきが少し慌てた素振りを見せた。

「ちよつと！ 美樹。」

水越渉が、気になった。

「鮎川瑠美のファンなの？」

上野美樹は、みずきが声を上げたので、話せなくなっていました。

「えゝ、まゝ。」

水越渉が、自慢話でもないのに得意げだ。

「鮎川瑠美のファンが、ここにも1人居るんだよ！ なー、誠ちゃん！」

土田守は、誠と鮎川留美のエピソードを話したくて仕方ない。

「凄いなだよ！ 誠が、鮎川瑠美をおぶったんだよ。」

公園で転んで歩けないところを、助けたんだよ。なっ！ 誠ちゃん。

「

上野美樹は、表情一つ変えずに言った。

「そうだったんですかー。」

水越渉は、驚かない3人を物足りなく思った。

「アレ？それだけ？ ファンだったら、もつと話が盛り上がると思っただのに。」

橘みずきが、聞いた。

「怪我の程度は、どうでしたか？」

野田誠は、自分のことなのに口を挟まなかったが、やっと口を開いた。

「足首を痛めたようで歩けなかったけど、骨折ほど痛がってもいなかったから、捻挫だと思うんだけど、結構腫れてたみたいだから、もしかしたら、折れてたのかも。その後、ホテルに救急車が来たから、マネージャーが呼んだんだと思うよ。」

みずきは、少し心配そうな表情を見せたものの、対応はクールだった。

「そうですね。大変でしたね。」

水越渉は、誠の駄目さ加減を言いたくて我慢できない。

「でも、誠つたらさ、連絡先を聞かれたのに、何も言わずに、さっさと帰って来たんだよ。何やってるんだか。それで、今、後悔して、今いちパツ！と、してないんだよ。」

ちよつと気に障ったのか、誠がすぐに言い返した。

「後悔なんかしてないよ。ただ、もう少し話をしておけば良かったかなって……。」

水越渉が、駄目出しした。

「それが、後悔だっつーの！」

黙ってしまった誠に、橘みずきが尋ねた。

「誠さんは、どうして鮎川瑠美が好きなの？」

「そりゃー、曲もいいし、声も好きだし、やっぱり顔が好みかなー。」

「

「そうなんですかー。曲と声と顔ですかー。」

真剣な趣で聞いていたみずきをよそに、井上知佳があっさりと話を守に振った。

「それより、土田さんは、好きな女性歌手とかは居るんですか？」

「特にいないなー。歌手とか好きになっても付き合えないし、現実的じゃないよ。」

水越渉も特に好きでもないのに、聞かれる前に自分から言った。

「本田優里って、演技力あるよね〜。」

上野美樹が、考えながら言った。

「そーかなー。みずきは、どう思う?。」

橘みずきは、顔が思い浮かばないらしい。

「ん〜、本田優里って、どんなだっけ?。」

井上知佳が、思いついたように言った。

「ほら、『日の丸学園』に出てる、いじめキャラの子だよ。」

橘みずきが、左手の平に、右手のグーを当てて言った。

「あ〜、あの子!。」

水越渉が、何言ってるのと言う顔して言った。

「違うし……。あれは、安藤玲だし。」

上野美樹は解っていたので、一人でニヤニヤうけていた。

「『キャバ城』に出てる、ツンとしたおばさんだよ。」

上野美樹がワザとおばさんと言ったのを聞いて、渉は不機嫌そうに言った。

「まだ26歳なんですけど……。」

井上知佳が、言った。

「年上が好きなんだ? じゃー、美樹なんて子供に見えちゃって好きじゃないよね。」

「違う、違う。何でそうなっちゃうの?。」

「それじゃー、美樹のこと、好き?。」

「えっ? そりゃー、どちらかと聞かれれば……。」

上野美樹が、少し呆れた感じで言った。

「別に無理しなくていいですけどー。私も好きじゃないですしー。」

涉が、困った顔をして言った。

「参ったなー。勘弁してよ。」

美樹と知佳が、吹き出して笑いだした。

涉も、つられて笑いだした。

すると、土田守が、がっかりしたように言った。

「やっぱり、渋滞してるよ。これじゃー電車で帰るより遅くなっちゃうな。」

井上知佳は、ニッコリしながら言った。

「気にしないでください。電車は乗り換えとか面倒だし、みんなできると楽しいですから。」

涉が、鮎川瑠美のCDを掛けた。

真つ先に、上野美樹が反応した。

「あつ！ 鮎川瑠美だ。この曲大好き。みずき、何ていう曲だっけ？」

橘みずきは、仕方なさそうに答えた。

「ノー・チェイス」

上野美樹は、音楽に合わせて、体でリズムを取っている。

「そうそう、ノー・チェイス。みずきは、何が好きだったっけ？」

橘みずきは、あまり答えたくなさそうだ。

「・・・カラフルラブ」

土田守が、思い出した。

「確か、誠も『カラフルラブ』が好きじゃなかったけ？」

誠は好きな割には、はしゃがない。

「好きだよ。デビュー曲でミリオン越えしたやつ。」

水越渉が、みずきを見て心配した。

「みずきちゃん、急に元気なくなっちゃって、どこか具合悪くなっ
た？」

しまったというような顔をして上野美樹が、悪いことを隠すような
感じで言った。

「大丈夫、大丈夫。私が変な話したからだよ。でも、この渋滞どこ
まで続くんだろうね！早く動き出すと良いね！ 能見台駅までだっ
たりして・・・。そしたら、あしたの朝になちやつたりしてね。」

水越渉は、美樹がごまかそうとした渋滞の話など耳に入っていない。

「変な話って、鮎川瑠美の事？」

上野美樹は、困り顔になった。

「いいから、いいから、気にしないで。」

井上知佳も、ガードに回った。

「そうそう、気にしないでください。」

野田誠は、場の空気を見殺して、たまに冴える時がある。

「もしかして、みずきちゃんは、鮎川瑠美が嫌いなの？」

上野美樹は、いつそう困り顔になった。

「嫌いなわけじゃないじゃん。何言っちゃってるの!」

井上知佳も、何か変だ。

「そ、そうだよ。ライブ見に来て、曲名だってすぐ言えるのに。そんなはずないじゃん!」

水越渉が、美樹や知佳の態度を見て、かばいたくなった。

「そーだよ。好きな曲は『カラフルラブ』だって言ってるのにね。何言ってるんだよ誠。」

野田誠は、構わず本人に聞いた。

「みずきちゃん、どーなの、鮎川瑠美が嫌いななの?」

美樹と知佳が、しつぽを踏まれた猫のように騒いだ。

静かに橘みずきが、嫌そうな表情で答えた。

「どーなのって、好きに決まってるでしょ。」

野田誠は、みずきが具合が悪いとは思っていない。

「じゃー、不機嫌そうなのは、本当に具合悪いの?」

橘みずきは、誠をひつこく感じていたが、本当の事を言っつもりもないので、具合の悪い振りをしようとした。

「そう。寄り掛かってもいい?」

野田誠は、少し嬉しそうだ。

「えっ? 別にいいけど。」

何だか解らないけど、ほっとした水越渉が振り向きながら、声を大きくした。

「フーフー、お熱いね〜。 守、エアコン強くして！」

上野美樹は、ヤジの類が嫌いだった。

「どうして、そういうこと言うの？」

水越渉には、自覚がなかった。

「俺、そんな悪いこと言ったけ？」

土田守も、女子達の雰囲気を感じた。

「もう、違う話しようぜ。俺さー、今、ノーパンなの。パンツ濡らしちゃって、替え無くなちゃってさ。他にノーパンの人居る？」

上野美樹が、うっぷんを晴らすかのように必要以上の大きなリアクションをとった。

「うっそー、キモイ！ 信じらんない！」

井上知佳も、美樹に続いた。

「ゲゲ、今、私、想像しちゃったー。どうしようー！」

水越渉が、悪乗りした。

「想像つて？ 守のアレを？ 意外に知佳ちゃんって、スケベなんだなー！」

井上知佳の声が一段と大きくなった。

「ちがーっわよ！ もーっ！ 信じらんない！」

土田守が、運転をしながら、もそっと言った。

「もしかして、知佳ちゃんも、ノーパン？」

水越渉は、馬鹿なのかもしれない。

「俺も、想像しちゃう！」

井上知佳が、一括した。

「ばーか！ そんなわけ、ないつうーの！」

土田守は、ターゲットを変えた。

「みずきちゃんのパンツって、黒でしょ？」

橘みずきは、急に言われたので焦った。

「ち、違っわよ！」

土田守も、馬鹿なのかもしれない。

「それじゃー、いちご柄だ！」

さすがの橘みずきも、口が悪くなった。

「あつたま、おかしいんじゃないですか！」

水越渉が、すました感じで言った。

「守君失礼だよ。スイカ柄に決まってるじゃないか！」

橘みずきは、当り前に言った。

「もー、ばか！」

守と渉には、シナリオが有った。

「ほら、誠！」

野田誠は、振られた意味が解らない。

「えっ？」

守と渉の声は続く。

「何やってるんだよ！ 早く椅子の上に立てよ！」

数秒後、誠は、ハッと気付き、急に椅子の上に立ち、ズボンを下ろした。

切ったスイカの大きな絵が描かれたパンツが丸見えになった。

一同「キヤー！」

誠は慌ててズボンを履いて、よろけて天井の脇に頭をぶつけた。
「痛てーっ！」

車内は爆笑に包まれた。

上野美樹は、笑いが止まらない。

「びっくり！ 野田さんがこんなキャラだったとは。」

橘みずきも、笑っている。

「ほんと、隣で急にズボン脱ぐから、焦っちゃったよー。」

土田守が、ルームミラーでみずきを見た。

「みずきちゃん、元気戻ったみたいだね。 誠君、お手柄だよ。」

野田誠が、横を見て言った。

「みずきちゃんは、笑顔がいいね。」

橘みずきが、ちょっと照れながら誠を見た。

「えっ？ もーっ。」

土田守は、仕切り屋だけに、気を使っていた。
「さーで、次は、尻取りでもしようか。」

第21話 「隠し事」(後書き)

お読み頂き、ありがとうございます。更新は、毎週土曜日20時です。

第22話 「しりとり」

水越渉は、調子に乗った。

「しりとりなら、罰ゲームは、カミングアウトにしよっぜ。」

井上知佳が、質問した。

「カミングアウトって、告白？」

土田守は、神経質なところが有った。

「俺さー、カミングアウトっ言葉、好きじゃないんだよね。ザンゲでいいじゃん！」

渉も知佳も、守の言っていることが良く解らないまま、黙ってしまった。

2人をよそに土田守が、積極的にゲームを進めて行く。

「順番決めジャンケン。」

「最初は、グー、ジャンケンばい！」

「1番、誠。」

「最初は、グー、ジャンケンばい！」

「2番、みずきちゃん。」

3番、渉。4番、守。5番、知佳。6番、美樹。に決まった。

「それじゃー、誠から、スタート！」

野田誠がちよつと考えて言った。

「それじゃー、……りんご。」

橘みずきは、誠の事を見ていて、誠が言つと直ぐに答えた。

「ごま。」

水越渉は、こついつた事が好きで、得意そつだ。

「マヨネーズ。」

土田守は、なかなか単語が出ない。

「ず、ず、ず、……。」

上野美樹が、待ち切れずに、割つて入つた。

「おそーい！ 時間切れ！」

土田守は、言い訳したい。

「運転してんだからさー、時間切れは無しー。」

井上知佳は、他人に対して厳しいところが有る。

「ダメダメ！ ザンゲ！ ザンゲ！」

全員のザンゲコールが、始まってしまった。

土田守が、観念した。

「もう、しょうがねーな！ じゃー、俺、今ノーパンで……。」

井上知佳は、守が言い終わらないうちに、すぐに言った。

「さつき言つたじゃん！ そんなのダメだよ。」

土田守は、最後まで言つてなかった。

「だからー、ノーパンで、オナラしましたー！」

一同「えーっ！」

井上知佳は、すぐに言った。

「くさーっ！ 何か臭ってる気がした！ もー、そんなのダメ〜。」

「え〜っ、ダメ？ なら、うん〜……東西医大受験したけど、落ちた。」

井上知佳が、急にトーンダウンして感心した。

「そーなんだ。はたから見ると、色々と悩んでいるんですね。」

水越渉には、羨ましいとしか思えなかった。

「一応、医者になろうとした訳だ。次行こう。次、守！」

土田守は、割と勇氣出して言ったのに、反応がこれだけか？と思った。

「質問はないの？ そう……。じゃースイカ。」

井上知佳「カメ。」

上野美樹「めがね。」

野田 誠「ねずみ。」

一巡目で、言葉が見つからない人はあまりいない。みんなすらすらと出てくる。

そして、橘みずきもあまり考えずに、さっと言ってしまった。

「みかん。 あっ！」

水越渉が、嬉しそうだ。

「どぼくん！ はい、みずきちゃん、ザンゲ。告白でもいいよ！」

橘みずきが、悔しそうだ。

「えー、なんでー、気をつけてたのに〜。どうしよう〜。」

しょうがないなー……きのう、彼氏と……別れました。」

一同 「えーっ！」

上野美樹が、焦った。

「言っちゃったのー！」

井上知佳も、心配そうだ。

「みずき、いいの？」

橘みずきは、吹っ切れている様子だ。

「いいよ、もう……。」

水越渉は、口が軽い。

「っていうことは、誠ちゃんは、失恋後の反動？」

橘みずきは、気にせず直ぐに反論した。

「違うよ！ 失恋じゃないもん！ 私がふったんだもん！」

土田守は、自分の努力が水の泡になるのを心配した。

「渉君、軽率な発言は慎むように。せっかく明るい雰囲気になったんだから。」

水越渉は、いたって明るい。

「はい、議長！ すみませんでした。（笑）」

橋みずきは、横に居る誠の顔を見た。

「誠さん、違うよ！ 失恋の反動なんかじゃないよ！ 寂しさ紛らす為じゃないよ！」

野田誠は、内心動揺していた。

「いいよ、別にどっちでも。気にしてないから。」

土田守は、先に進めた方が良いと思った。

「みずきちゃん、次に行きますか。」

橋みずきも素直に応じた。

「はい。それでは、うめぼし。」

水越渉はマイペースだ。

「しまつま。」

しりとりは続いた。

第22話 「しりとりに」(後書き)

お読み頂き、ありがとうございます。更新は、毎週土曜日20時です。

第23話 「GTR」

朝比奈に出ると渋滞も緩和されていたが、土田守はトイレ休憩が必要と考えた。

「もうすぐ着くけど、ファミレスで飯でも食わない？」

水越渉も、守と同じ考えだった。

「そうだね、トイレも行きたいし、このままさよならも、ちょっと寂しい気がするし。」

橘みずきは、夕食をどうしようか迷っていたようだ。

「そうね、家に帰ってもご飯用意してないし。」

上野美樹は、みずきに合わせることが多い。

「私も食べて帰るつもりだったから。」

井上知佳も、このままサヨナラするのには少し抵抗があった。

「定食とか食べたい気がする。」

野田誠は、知佳の言葉に妙に同感した。

「分かるよ、その気持ち。僕もほとんど毎日、朝抜きで、夜は、カップめんや、コンビニ弁当だから、学食で定食食つと、何かほっとするもんな。」

井上知佳は、少しふざけた。

「みずき、野田さん夜はカップめんだって！ 毎日通って何か作ってあげれば！ みずき、料理得意なんですよ。ねっ！」

橘みずきは、困り顔になった。

「ちよつと、知佳つたら！」

土田守も、みんなが賛成したのでほっとしたせいか、調子に乗って冷やかした。

「おーおー、いいじゃない！ 毎日通うなんて面倒くさいから、一緒に住んじやつたら？」

野田誠は、困惑気味だ。

「守、何言い出してんだよ。橘さんだつて、困ってるじゃないか。」

橘みずきは、さっきの別れ話といい、ちよつと変になっている様子だった。

「一緒に住むのは無理ですけど、ご飯作りに行くのはありかなつて・・・。」

水越渉が羨ましくもあつて、ヤジつた。

「おーおー、言わせちゃつたね！ この、色男が！」

上野美樹が、びっくりした。

「うっそー、みずきが、ご飯作りに行くつて！」

土田守まで、面白がつた。

「誠ちゃん、どうすんの？ どうすんの？」

誠は、みんなが騒ぎ出したのが、少し嫌だった。

「そんなの、いいですよ。家だつて離れてるし。」

井上知佳が、聞いた。

「野田さんつて、どこに住んでるんでしたっけ？」

誠より早く、土田守が答えた。

「蒲田のボロアパート。その隣の大家が俺んち。」

知佳が、思い出したようだった。

「あっ！ そうだった。」

上野美樹は、水越渉も近くだと思った。

「水越さんも、近くなんですか？」

水越渉は、何で聞くのかと思った。

「あー、俺は、川崎。ちょっと離れてるかな。さっき免許証見たじやん。」

「あー、そっか。でも、横浜からそんなに遠くもないですよね。みんな会う気になれば会えるんですね。」

井上知佳が、ハツとした。

「えーっ！ 美樹も、夕飯作りに通う気？」

上野美樹が、慌てた。

「ち、違うわよ！ 変なこと言わないでよ。」

水越渉が、突っ込みを入れた。

「変なことなんだ。」

渉が、傷ついたように言うと、美樹が困った表情で言った。

「あー、そういう意味じゃなくて……。」

土田守が、チラッと助手席を見ると、うつむいて、渉がニタニタ笑っていた。

「おっ！ 大変だ。渉が泣いてる。」

美樹は、2人がふざけているのは解っていたが、対応に困った。

「もー、ちよつとやめてくださいよ！」

土田守が、笑いながら言った。

「ファミレス在ったから、入るよ。」

みんなを乗せた土田の白い高級ワゴン車は、ファミレスの駐車場に止まった。

緊張していたせいか乗り込む時には、車にあまり関心が湧かなかったが、色々と話をしたせいか、降りた車を見て知佳が切り出した。

「この車って、高いんでしょ？」

水越渉は、車が好きだった。

「守、400万だっけ？」

「そんなもんだったかな。」

水越渉は、自分の事のように話した。

「他にもベンツ持ってんだぜ。」

「あー、オヤジのだけどね。」

野田誠が、少し前に見た光景の謎が解決した。

「この前乗ってたのオヤジさんのだったんだー。」

水越渉が、誠に聞いた。

「その時のベンツいくらだと思っ？」

野田誠は、車に興味がない。

「分かんないなー、600万くらい？」

「それじゃー半分。1200万だっけ？」

土田守も、車に興味がない。

「あー、そんなもんだと思う。」

井上知佳の目の輝きが変わった。

「すごい！ えっ？ それじゃー、この車は、守さんの？」

水越渉は、得意げだ。

「そう。何にするか迷ってたから、俺がこれがいいって言ったんだ。こうやって、みんなで遊びに行けるじゃん。」

「へーっ、そうなんだー。水越さんは、車持ってないんですか？」

その質問が、今まで自分の事のように話していた、渉の鼻を折ってしまった。

「あつ、そーね。オヤジがジジ臭いセダン持ってるけど、俺は持ってないよ。だから、ボロでもいいから自分のが欲しくてバイトして、金貯めてるところ。」

上野美樹は、渉が少ししよげたのが解った。

「バイトですかー。自分で働いて買うなんて偉いじゃないですか。それで、何を買うんですか？」

井上知佳は、車には特別な興味がない。

「やっぱり、気になるんだ？ 美樹は、車好きなんですよ。速いのが。」

「そうなんだー。バイト代で買うから、車検付で50万位のスカイラインとか。車って諸費用が、高いんだよな。任意保険とか入ると車代の他に、30万位必要だし、ただ、駐車場は有るから助かるんだけど。」

上野美樹はスポーツカーが好きだ。

「スカイラインカー、GTRとかいいですよー。」

「知ってるんだね。でも、無理無理。GTRなんて、相当古いのだって高いもん。」

井上知佳が、思い出したように言った。

「確か、うちのお兄ちゃんが、それ乗ってる。」

「うっそ！お兄さんいるの？」

「相当なカーキチで、中古で買って、買ったお金以上に改造費掛けちゃって、ばっかみたい。始めから新車買えばいいのに。」

上野美樹も、初耳だった。

「へーっ、そうだったんだー。今度、乗せてほしいな。」

「うん、いいよ。水越さんも来る？」

「いいや、俺は人の物に興味ないから遠慮しておくよ。」

上野美樹は、渉の車に興味を持った。

「そっかー。それじゃー、いつ頃、買う予定なの？」

水越渉は、指を折ってお金の計算をした。

「1年後かなー。」

「えーっ！ そんな先なの？」

「だって、80万くらい貯めないと。」

土田守が、痛いところを突いてきた。

「車好きなのに、1年も我慢できんのか？」

水越渉は、うつむき加減になってきた。

「仕方ねーじゃん。バイトじゃローンなんか無理だし、借金嫌いだし。」

上野美樹の声が少し大きくなった。

「すごい！ 借金が嫌いだからって、好きな車を1年も我慢するなんて。」

土田守の金持ち発言が出た。

「じゃー、俺が貸してやるよ。利息無しでいいよ。」

「それはちょっとな。」

上野美樹は、不思議に思った。

「どーして？ 仲いいんでしょ、せつかく言ってくれてるんだし、早く車買って、月々少しずつ返せばいいんじゃないの？ 何だか、私、涉さんとドライブ行きたくなくなっちゃった。」

土田守が、びつくりした。

「おーっ！ これは、もう買っちゃいけないでしょ。何なら、GTRとかでもいいぜ。」

上野美樹が騒ぎ出した。

「すーごーい！ GTRだって！ 乗りたーい！ 乗りたーい！」

「あのさー美樹ちゃん……、俺、借金、嫌いだって言ったじやん。」

「あーっ、そっかー。ごめんなさい。つい調子に乗っちゃって……。」

土田守が、何か思いついたらしい。

「そーだ！ いい手がある。俺が、そのGTRとかいうの買っちゃって、涉に貸すつーのはどうよ。俺にしては、いい考えでしょ！」

上野美樹が、声を大きくした。

「いーよ！ それ、ナイスアイデア。守さん、冴えてます！……あー、また、余計な事言っちゃったー。ごめんなさい。」

「別に、大丈夫だって。なっ、涉！ 俺の考え、ナイスアイデアだろ？」

「うっ、うーん、でも、GTRって高いぜ。中古だって……。」

「何言ってたんだよ、俺が買うのに、中古なんて買うわけないじゃん。」

「

「えっ！ 新車？ じゃー、900万くらいしちゃうよ。」

上野美樹の声がまた大きくなった。

「そんなに、するの！ 国産車なのに。」

「案外、高いんだな！。でも、速いんだろ？」

「相当に。」

「なら、いいや。速い車もどんなのが乗ってみたいし。あした買いに行こう！」

「あした？」

上野美樹も、興味津々だ。

「私も、行っていいですか？」

「もちろん、なっ！ 渋。」

井上知佳は、お金持ちが好きだ。

「私も、行っていい？」

橘みずきは、この雰囲気を今日一日で終わらせたくなかった。

「ねえー、みんなで行こうよ。野田さんも、いいでしょー！」

「いいよ、どうせ行くことになるだろうし。」

橘みずきは、2人でドライブがしたいと思った。

「野田さんも免許取ればいいのに。」

「車に興味無いんだよね。」

「ドライブとか行けると、普通の女の子は喜ぶと思うんだけどな。」

井上知佳が、笑いだした。

「それって、みずきのことでしょ！　ハハハッ！」

「もー、知佳ったら。」

「何よ、いまさら。野田さんって呼び方も、固いよ。誠さんにすれば？」

土田守が、提案した。

「そーだ。みんな、下の名前で呼ぶことにしようよ。」

水越渉には、免許証を取りたいと思わない誠の気持が解らなかつた。「だけどさー、誠。免許は有った方がいいよ。車は借りればいいんだし。みずきちゃんと2人きりになれるんだぜ。夜の湾岸なんて走ったら、みずきちゃんもその気になっちゃうかもよ！」

言われたみずきは、たまったものではない。

「ちよつとー！何言い出しててるんですか！」

上野美樹は、誰の見方なのか解らない時がある。

「おかしいな？　このあいだ、映画でそんなシーン出て来て、いいなーって言ったの誰だっけ？」

「もー、美樹！変なこと言わないでよ。美樹だって、さっきラブホの前通った時、行って見たーいって言ってたくせに。」

「言っていない、言っていない！ 中がどんな風になってるのかわかって、言っただけでしょ。」

土田守が、気にした。

「へーっ、美樹ちゃんって、そんなの興味あるんだ？」

「ない、ない！」

土田守は、追及しなくなった。

「えっ？ 今、自分で言ったじゃん？」

美樹が返事に困っていると、知佳が守に言った。

「そんなこと言っていないで、あした行くんでしょ？ どこに何時に集合する？」

土田守も、ちょっと突っ込み過ぎたかなと反省していた。

「そうだね。横浜駅でいいんじゃない？」

「でも、守さんの家の近くのお店で買っただけでしょ？ こっちまで来て、戻るのがって大変だよな。」

「そっかー。でも、それじゃーどうする？」

「私達が、1時に守さんの家の最寄り駅まで行きますよ。ねっ、美樹もみずきも、それでいいよね？」

上野美樹・橘みずきは、合わせて言った。
「異議なし。」

「それで、最寄駅ってどこですか？」

「京急蒲田。改札に1時でいいかな？」

上野美樹・橘みずき・井上知佳と一緒に。

「いいとも。」

1時間半くらい食べながら話した後、ファミレスを出て、能見台駅に着いた。

土田 守は、車から降りる女子達に言った。

「それじゃー、今日はどうもありがとう。楽しかった。」

水越 渉も、後ろに振り向きながら言った。

「あしたまたな！」

井上知佳が、手を振りながら言った。

「楽しみー！」

上野美樹も手を振りながら、渉を見ていた。

「ありがとう、ばいばい！」

橘みずきは最後に降りながら言った。

「さよなら、またあしたね。」

3人を降ろして、車は水越渉の家が在る川崎に向かった。

第23話 「GTR」(後書き)

手違いで、更新時間が遅れた事をお詫びします。

第24話 「運転免許証」

男3人になった車内は、おしゃべりが始まった。

土田守が、ハンドルを握りながら、口火を切った。

「よーよー、やったじゃん！ 明日も約束したし。」

水越渉も嬉しそうだ。

「始めは、どうなるのかと思ったら、女子高生3人と仲良くなっちゃったよな。」

土田守は、ホテルの案内係の人を思い出した。

「渉は、案内係の大塚美佳さんは、どうすんのよ？」

「どうするも、こうするも、付き合っに決まってるじゃない。」

「それじゃー、上野美樹ちゃんは、どうすんのよ？」

「まー、適当に、成り行きまかせっーか……。」

「オーオー、やるね、渉ちゃん。二股ですかー。」

「彼女がいるのに、ナンパする守ちゃんに、言われたくないんすっけど。」

守の声が変わって、まじめな口調になった。

「由香には、絶対に内緒だからな！」

「分かってるよ。けどさー、橘みずきちゃん、可愛かったよなー。」

「渉も、そう思ったんだ？」

「誰だって、思うでしょ。あの顔なら化粧決めれば芸能人になれんじゃないねえ？」

「下手したら、みずきちゃんの奪い合いになるところだったかもね？」

「そーねー、俺たちに美佳ちゃんや由香ちゃんがいなかったら、なつたかもな。」

「でも、みずきちゃんは、誠のことが気に入ってたようだし。誠はどうなんだ？」

一番後ろの席に一人座って窓の外を眺めていた誠が、運転席の方を向いて話に加わった。

「どうって、そりゃ可愛いと思うけど……。」

土田守は、煮え切らない誠の態度が気になった。

「けど、何だよ。また、鮎川瑠美か？ 誠が、連絡先聞かれたのに、教えなかったんだろ。忘れちまえよ。」

水越渉も、守とほぼ同じ考えた。

「俺は、鮎川瑠美より、みずきちゃんの方が、いいけどなー。」

守は、人にあれこれ言うのが好きだ。

「俺も、そう思う。第一、現実的でしょ。万が一、鮎川瑠美と仲良くなったところで、先には進まないよ。毎日忙しくて、会う時間な

んかありやしなさいさ。それに、彼女の周りには、カツコイイ奴ばかりでしょー。わざわざ、お前みたいな一般人、それも2流大学の学生と恋愛するわけがないでしょ。所詮、住む世界が違うのさ。」

渉が、口を挟んだ

「まー、守みたいに金持ちなら少しは有りえるかもねー。」

誠は、何度も同じような話をしていることに、少し腹が立った。

「それくらい僕だって、分かってるよ。中途半端に上手くいっても、その後に待ってるものは、さよならだと分かっていたから、連絡先も言わなかったし。」

渉は誠が計算していたことを知って、少しムツとした。

「誠、お前、中途半端にでも、上手くいくと思っただ？ あの大人気の鮎川瑠美と……。大した自信だなー。」

「イヤ、そういう意味じゃなくて……。」

守は、結局、いつも自分が正しいと思っている。

「いいから、鮎川瑠美は忘れて、みずきちゃんと上手くやれよ。こんなチャンス滅多にないんだから、なっ！」

誠は、空返事をした。

「まーね。」

渉は、気分が悪くなるだけだと思い、話を変えた。

「ところで、誠は、本当に車の免許取らないのか？」

「んー、有ると便利だとは思っけど、面倒臭いし、金も無いし。」

守は、金が無いという言葉に敏感だ。

「貸してやるよ。早いとこ取った方がいいんじゃないの？」

「ありがとう、でも返す宛も無いしなー。」

渉は、単純だ。思った事をすぐ口に出す。

「バイト、多くすればいいじゃん。みずきちゃんは、相当、誠と下ライブ行きたがってたぜ。」

「そんなこと言っても、バイト増やせないよ。ゼミやサークルも有るし。」

「あつ！ それならいい方法があるよ。」

渉のひらめきは、今まで上手く行ったことが無い。

それでも守は、聞きたがる。

「何だよ。どんな方法だよ？」

「教習所行かないで、試験場で取っちゃうんだよー！」

「なるほど。だけど、難しいんじゃないの？」

「何度やっても合格しないと、結局、高くつくんじゃないの？」

「大丈夫！ 誠は運動神経いいし、俺がバッチリ教えてやつから。」

誠は、不安げだ。

「そんなこと、出来るの？」

渉は、何だかやる気が出てきました。

「そうだ、守。病院の駐車場貸せよ。」

誠は、余計に不安になった。

「別にそんなことまでして、免許欲しいと思わないから、いいよ。また、この次の機会に頼むよ。」

渉は、不満そうだった。

「まったく。せつかくやる気出たのに。」

守は、何でそこまで欲しいと思えないのか不思議だった。

「そのうち絶対、欲しくなるのに。」

第25話 「謎」

渉は、免許の話はもう、どうでも良くなっていた。
ふと、上野美樹の言っていた事を思い出した。

「なー、守。さっきさー、美樹ちゃんが、私たちもサン・パシフィックホテルに泊ったんです。鮎川瑠美さんを見に来て……。とか言ってた時に、みずきちゃんが、慌てて止めたのは、何でだと思っ？」

「そりゃー、俺達に聞かれなくなかったんだろ。」

「だからー、それが何でかつーんだよ！」

誠が、おもむろに言った。

「鮎川瑠美さんを見に来て、何でわざわざサン・パシフィックホテルに泊ったんだろっ？ 横浜からだど、普通は日帰りだよね。」

「それはー、俺達だって、同じじゃんかよ。」

2人に言いたい事が伝わらないことで、渉は少しいらついた。

構わず、誠は続けた。

「まー、そうかもしれないけど、普通に考えたら、高い金出して、あのホテルに高校生が泊るか？ 次の日にまた来れば、いいんじゃないの？」

守が、会話に入ってきた。

「それはー、俺達みたいに、安く泊まれたのかもよ。 それがー、あのホテルに、用事が有ったのかもしれないし。」

渉は、やっとかゆい所に手が届いたような感じがした。

「そう！俺が言いたいのは、それよ。その用事を俺達に知られなくなくて、みずきちゃんは、話を止めたんだよ。あの後、鮎川留美の話で、おかしくなったのを考えると、彼女達は鮎川留美に会うことが用事で、あのホテルに行ったんだよ。」

誠が、首を傾げた。

「あのホテルに、鮎川留美が泊ることを知ってたっ—こと？そんなこと、解るの？」

守が、答えた。

「普通は、知らないんじゃないの。それに、ホテルに泊まったからって、会える訳じゃないし。」

渉は、いい加減、答えが知りたい。

「じゃ—何でだよ。」

誠が、珍しく話に喰いついている。

「だから、それが解らないんだよ。みずきちゃんが、鮎川留美の話を嫌がるのもさ。」

守は、運転をしながら、考えるような話は苦手だ。

「誠が言ったように、本当は、鮎川留美の事が、嫌いなんじゃないの？」

渉は、質問屋になってしまった。

「それじゃ—、嫌いなのに、会いに来たのは、何でだよ。」

守は、運転をしながら考えるのが面倒臭くなってきた。

「知らないよ！会わなきゃいけない用事でも有ったんじゃないの！」

誠は、真剣に考えていた。

「用事が有るからって、会える相手でもないでしょ？それじゃさー、どうにか上手いことやって鮎川留美に会ったとして、その時に、みずきちゃんが嫌な思いをしたとか。」

渉が、感心した。

「なるほどー。でも、よほど親しいファンじゃないと会えないでしょ？ いやいや、ファンじゃ無理だな。友達とか関係者じゃないと。」

守は、渉の家が近くなったのが、気になった。

「えー、そんなだったら、もっと自慢するでしょ！ 誠が、ファンだって言ってるんだからさー。」

渉が見なれた街並みを見て、いよいよ着いたなーって思った。

「まーね。……あーっ、もう何だかわかんねー。」

守が、話を終わりにしたかった。

「もういいじゃん、明日また会うんだし、もしかしたら、その先も、付き合い続くかもしれないし。そのうち解るかもだし。」

誠は、面倒臭くなってきた。

「別に解らなくても、いいんじゃないの？」

そうこうしているうちに水越渉の家に着いた。

渉の家は、標準的な一軒家だった。

しかし、川崎市に一戸建てを買って、子供を大学に進学させられるというのは、平均以上の収入の家庭なのだろう。

「じゃー、また明日！」

少し前まで、にぎやかだった車内も、2人だけになってしまった。車は土田邸とその敷地内の誠の借りているアパートが在る蒲田へ向かった。

誠と守は、とりわけ心が通じるものが有った。誠も守となら、つい本音も出てしまう。

「守は、いいよなー。家はデカイし可愛い彼女はいるし、好きな車は乗れるし、将来の不安なんか無いだろうし。第一、金持ちだし、世の中不公平だよな。」

「将来の事は、俺だって色々と考えているんだ。それに、世の中、金じゃないよ。ハートだよ。愛だよ。愛。解る？ 誠ちゃん。」

「金持ちが言っても、説得力無いよ。」

「そうか？ でも親父に、明日、車買うから、1000万くれって言うのが結構大変なんだなー、何だかんだ文句の嵐さ。」

「でも、結局、1000万、貰えるんだろうー。うらやましーよ。」

「病院貰える兄貴に比べれば、1000万くらいどーということはないし。」

「守も、医者になればよかったのに。」

「おいおい、俺が頭悪いの、お前知ってるじゃん。」

小さい時から、病院を継ぐのは兄貴ってなってたから、親は兄貴の

成績にうるさくて、行く学校も決められちゃってたし。

兄貴が大変な思いをしてるの知ってたから、俺はあんなの御免だと思っただけ勝手して来たんだ。親も、俺のことなんか、どうでもいいみたいだし……。」

「そっかー。金持ちは金持ちで、色々有るんだなー。」

うちの親は将来について何も言わないから、未だに何になるか決めてないし。って云うか、自分がいい加減なのが悪いんだけど。」

「そうなんだよ。卒業したらどうしようか。ほんと、悩んじゃうよ。」

「親が紹介してくれるんじゃないの？」

「だからー、親の力、借りるのは、御免なんだよ。」

「だけど、バイトもしてないし、学費も親に出してもらってるし、小遣いだっていっぱい貰ってるし、だいたい明日買う高い車だってお金出してもらうのに、おかしいんじゃないの？」

「誠には、分かんねえかなー。金出してもらうのは、こんな中途半端な俺にした償い。分からねえ？ 仕事まで親に決められたら、これから先も、そこに自分が居ないんだよ。分かんたる？」

「金持ちの悩みってやつ？」

「違うよ！ お前にも同じような事、あんだろ？ 分かんねえかなー。」

「俺には、贅沢な悩みと思うけどなー。」

「まあーいいや。そんで、誠は、何になんのよ？」

「うちの大学じゃー、いいところに就職出来ないだろうし、最近、公務員つーのも有りかなくなって思ってたんだ。」

「なるほどねー、それなりに考えてるんだなー。」

第26話 「翌朝」

守の運転する車は、大きな家に着いた。

石垣で囲まれた大きなシャッターの前に止まり、守は車中のスイッチを操作した。

すると、大きなシャッターはガラガラと開き、左右に5台ずつ10台は入ろうかと

いうガレージが目の前に広がった。

白いワゴン車は、ゆっくりと中へ入り、2台の大きなベンツの隣へかなりの余裕を空けて止めた。

誠は、車を降りるなり言った。

「こないだのベンツだ！ しかも、2台。ちょっと前までは、国産車だったよね？」

「2週間くらい前に、買い換えたみたい。兄貴もついでに、同じの買ったみたい。」

「ここに、GTRも並ぶのかー。でもまだ半分以上、空いてるよね。」

「お客の為に何台分かは空けとかなきゃ駄目なんだ。でも、誠も車買ったら、タダで止めていいよ。」

「そう言ってもらっても、いつになることやら……。じゃーまた明日。」

「オー、じゃーな！」

誠は、ガレージから階段を上がり、外へ出るドアを開けて、敷地内にあるアパートへ向かった。

テニスコートが5面は入りそうな、綺麗な芝生の脇を歩くと、アイボリーホワイト色の組み立て式2×4住宅の2階建てアパートが有った。

各階5部屋ずつ有り、間取りは全て同じで、6畳洋間と4畳半のダイニング、それにユニットバス、トイレ、洗面台と乾燥機付き洗濯機も有り、月4万円は周辺の相場よりかなり安かった。

壁は白が基調で、縦に鶯色のピンストライプが入った物が洋間、縦にこげ茶色のピンスト

ライプが入った物がダイニングを飾っていた。

家具なども前の入居者の置いて行った物を誠は特に手を加えることなく、そのまま使っていた。

誠は、テニスが好きで、そのグッツがあちらこちらに置いてあった。そして、県大会で優勝した時のトロフィーが本棚に有った。

自分が一番輝いていた時、辛い練習に耐えて頑張っていた時のことを思い出さず、

苦しいことがあった時に乗り越えられると思って、実家から持って来て、わざと目につ

くところに置いてあった。

誠は風呂から出ると、慣れないことをしていた緊張感や疲れのせいで、すぐに寝てしま

った。

夜中に一度も起きることも無く、カーテン越しに明るい陽の光が誠の顔を照らした。

「あゝ、いけねっ！もうこんな時間。」

時計を見ると、11時になっていた。

「急いで起きて、仕度しないと・・・。」

その時、携帯が鳴った。守からだった。

「よっ！おはよう！もう出れる？」

「悪いー、今起きたとこ。」

「そっかー、相変わらずだな。涉からメールで、11時半に駅に着くから、何か食おうぜだって。」

「分かった、すぐ用意して車へ行くよ。」

「じゃー15分くらいしたら車に居るよ。」

誠は、急いで歯を磨き、いつも着慣れたポロシャツにジーンズをはいた。

ふと、考えてみると、昨日着ていた物だった。

「しまった！女の子に会うのに、同じ物着てる分けにはいかないなー。」

衣装ケースを探ってみた。

テニスをしているせいか、ポロシャツはやたらと沢山有った。

「ポロシャツくらいは取り替えていかないとな。」

ペパーミントカラーのポロシャツを着てみた。

「これでいいっか。」

靴は、これまたテニスシューズばかりで、お気に入りの物を履くと、守の待つ車へ向かった。

「お待たせ！」

「ウィツス！」

「あれ？守。なんかいつもと違くない？」

「ちょっとは、見た目良くしないとね。」

「あゝっ、髪かー。なんかきちっとした感じだね。」

「おー、スプレーで、ガチガチよ。」

「彼女がいるのに、しょうもねえーなー。」

「誠は、少しおしゃれした方がいいんじゃないの？」

「いつも、ポロシャツにジーンズにスニーカーじゃ、少年のようだよ。」

「おしゃれなんか興味ないよ。」

車は、土田邸を出ると、すぐに蒲田駅前に着いた。

11時半ぴつたり、いつもの待ち合わせの場所に滑り込んだ。

渉がすでに待っていて、守の車を見ると手を挙げた。
渉の前に車が止まり、渉が助手席のドアを開けた。

「ウィツス！」

助手席に座りこむ渉を見ると、誠が気がついた。

「あれ？ 渉も髪が変。」

渉は、自分ではかつこ良く決めて来たつもりだった。

「変とは何だよ！」

誠は、渉の気持など考えずに、目に入ってきた感じをそのまま口にした。

「なんか、頭の上で竜巻でも起きたみたいだなー。」

渉は、誠の口にした言葉を無意識のうちに、頭に浮かべて、変に納得してしまった。

「これでも、結構時間掛かってんだぞ。誠がナチュラル過ぎんじゃないの？」

誠は、髪の手入れなどしたことが無い。

今朝も、手を濡らして、手グシを入れただけだ。

「見た目じゃなくて、中身で勝負よ。」

「中身ねえ〜。」

守が、3人でたまに来る店を指差した。

「飯、あそこでいいだろ？」

誠が答えた。

「あー、でも、もしかしたら、みずきちちゃん達、食べないで来るんじゃないの?」

「そーだなー、どうする?」

渉が、まるで子供のように言った。

「俺、待てないよ。腹、ペコペコだよ。」

誠もお腹が空いてきたらしい。

「今食って、後で食べることになったら、軽いものにすれば良いんじゃないの?」

守が、携帯を取り出した。

「面倒だから、メールしてみるよ。」

渉が、興味深げに覗きこんだ。

「誰に、メールしてるの?」

「知佳ちゃんに決まってるだろ。」

誠が、突然、思い出したかのように言った。

「渉、ホテルの案内係りの大塚美佳さんだっけ? あっちはどうするんよ?」

「何、突然、言い出してんだよ。まー、どうするもこうするも、付き合いたいさ。」

誠が、いつもの彼らしくないことを言った。

「知らないぞ。変なことになっても。」

「2人のこと良くも知らないのに、選べないだろ？ 性格が分かってから決めれば良いんじゃないか？ なー、守？」

メールの送信を終えた守が、ビクツとした。

「急に、俺に振るなよ。」

誠は、正直言つて2人の行動が理解できない。

「守は、犯罪者だからなー。あんなにいい彼女がいるのに、ナンパなんかして、女子

高生まで騙してさ。知佳ちゃんが本気になったらどうする気だよ。」

「湘南にナンパされに来てる女子高生で、本気で恋する乙女なんて居ないさ。みんな

遊びと割り切ってるに決まってるさ。」

誠は、守の言っていることは、理解出来た。ケバイ女の子なんかは、そういう風にも

見えていたし、声を掛けたキャバ嬢なんかもそうだった。でも、みずき達には、当て

はまらないと感じていた。

「そうかなー、俺にはあの3人はそういう風には見えないけどなー。」

渉は、言い合つても無駄な事だと思った。

「まーいいじゃん。今日でお別れになるかもしれないだし、先のこと考えても疲れるだけだよ。」

守も、誠のように感じてくれた。でも、あまり深く考えることはし

ない。

「そーだよ、誠チャン。先のことなんか分からないんだからさ。」

誠も、先の事はどうなるか解らないという点では同感だった。

守の携帯が鳴った。

「おっ！メールが返ってきた。」

渉が、覗いた。

「何だつて？」

守が、渉を邪魔そうに避けた。

「だから、今読んでるって！・・・途中で3人一緒に食べたつて。」

渉が、ニッコリした。

「そーか、それなら俺達も、安心して食うか！」

3人は、しっかりと朝食とランチを摂るために、レストランに入った。

3人は、いつもの席に着くとメニューを見て、それぞれ好きなものを注文した。

守と誠が何を話そうかと考えているその時に、渉がいつも提げている大きいシヨルダー

カバンから、嬉しそうな表情をしながら本を取り出した。

それはGTRの本で、カラー写真が沢山有り、少し高そうな物だった。

渉は、料理が運ばれて来ても、食べながら楽しそうに色々と説明をした。

車に大して興味の無い2人は、半分うわの空でうなずいて、渉の勢

いに合わせていた。

このままだと、何時終わるか解らない渉の講義に、守がしびれを切らした。

「そろそろ行くか？」

渉は、水を差されても満足そうに答えた。

「ニスモ仕様の話は、またこの次な。」

誠が、ため息をついて、立ち上がった。

「なんか疲れちゃったなー。」

第27話 「待ち合わせ」

3人は、車に乗って駅前にやって来た。

守は、駐禁切符を切られるのを気にして、車に残るつもりでいた。
「ここで待ってるから、2人で改札まで行ってくれよ。」

守が車に残るのは、よくあるパターンで涉も誠も心得ていた。

「分かった。 誠、行くぞ。」

「はいよ。」

2人は、車から降りて、改札へ向かった。

改札に近づくと、手を振っている女の子が見えた。

涉が、美樹達だとすぐに解った。

「やーっ！」

上野美樹が、にこやかに文句を言った。

「遅いなー。 10分も待つちゃったよ。」

涉は、腕時計を見た。

「えっ？ 今ちょうど1時だよ。」

「そんな時間ぴったり都合のいい電車が有るわけないじゃん。
遅れちゃいけないんだから、普通、少し前に来てるでしょ。」

誠は、もつともだと思って謝った。

「はいはい、僕達も、少し前に来ているべきでした。 すいません。」

でも、渉はそうはいかなかった。

「遅れたわけじゃないんだから、謝ることなんてねえよ。」

上野美樹も、軽く「ゴメン、ゴメン。」と言ってもらって、挨拶代わりのやり取りにするつもりもない言葉のつもりだった。でも、渉の思ってもいなかった態度が、「イラッ」と、きてしまった。

「だけど、待たせたんだから、謝ってくれてもいいでしょ？ 時間ぴったりに来るなんて、有り得ないんですけどー。」

渉は、謝る気なんてない。

「だから、待たせたんじゃないって。約束は、1時なんだから……」

橘みずきは、今日の主役とも言つて良い2人が、喧嘩したらつまらなくなると思つて、割つて入った。

「ほら、行こうよ！ 速い車見るんですよ。GTRだっけ？ 凄いでしょ？」

誠も、みずきの気遣いに気が付いて、2人に声を掛けた。

「そうだよ。2人も車が好きなんだから、車の話をすればいいじゃない！ 渉、GTRって、何キ口出るんだよ？ 美樹ちゃんは、知ってる？」

渉と美樹のことなど気にした様子もない井上知佳だったが、守が居ないのが少し不安になった。

「守さんは、車で待ってるの？」

誠は、知佳の言葉で、ここに居て話しているより、すぐに動いた方

が良いと思った。

「待つてるよ！さあ、行こう！」

5人は、歩き出した。

みずきが、誠の横にスルスルと近づいてきた。

「美樹は、何でもすぐ口に出しちゃうから、ごめんね。

誠さんが、ああ言ってくれて助かった。」

「そんな大げさなもんじゃないよ。」

「二人は大丈夫かな？」

「渉は、引きずらないから大丈夫だと思うよ。僕達の間でもよくあるから。」

一番後ろを歩いていた渉は、知佳と並んでいた美樹に近づいて話しかけた。

「さつきは、ちょっとムキになっちゃった。わりいー。」

「いいの。遅れたわけじゃないんだし、突っ掛かったのは私の方だから。・・・早く会いたいと思ってたりなんかしてたかなーって・・・。」

「俺の事、好きになつてったんだ？」

「どうして、そういう言い方するかなー？ もう、誰が、あんなのことなんか。」

「そんな、照れなくなってるいいのに。」

「ばーか。」

ひとりトーンダウンしていた知佳が、4人の会話を聞いて呆れた表情になっていたが、車の脇に守が立っている姿を見ると、にこやかになって足取りも速くなった。

井上知佳は、守の前に立つとニッコリとお辞儀をした。

「こんにちは！ 昨日はどうも。」

「やーっ！ こちらこそ。今日の服も可愛いねー。」

この日の知佳は、薄いピンクのブラウスに濃いピンクのミニスカートとキラキラした飾りの付いたサンダルを履いていた。

「そう？ 良かったー。ちょっと目立つかな？ と思っただけど、可愛い感じの女の子が好きだって言ってたから、思い切っちゃった。」

「知佳ちゃんらしくて、とってもいいよ。」

「うれしいー。知佳、助手席に乗る！」

知佳が助手席に乗り込んだので、次に来た誠とみずきは、昨日と同じ後ろの席に入った。

残った真ん中の席に、渉と美樹が座った。

ドアが閉められると橘みずきが言った。

「これが自然な席順だね。これからは、これで決まりだね。」

上野美樹が、渉の顔を見ながら言った。

「ケンカしないといいけどねー！」

「美樹がしなければ、大丈夫だよ。」
と、知佳が言うと、みんなが美樹を見た。

「私一人が悪者？」

涉が、笑顔で言った。

「悪者だなんて。．．．そんなかわいい悪者なんていないよ。」

美樹が、思わず大きな声を出した。

「えーっ、どうしちゃったの？」

井上知佳が、負けずに大きな声を出した。

「守さん、出発！」

守がアクセルを踏んで、いつかの涉の真似をした。

「がってんだ！」

みんなから、笑い声が漏れた。

第28話 「誠の好きな車」

白く輝くワゴン車は、カーショップに向かって走り出した。10分くらい走ると、GTRを売っている日産のお店に着き、みんな、ぞろぞろとショールームに入って行った。

すぐに、渉と美樹の目の色が変わった。

グレーメタリック色のGTRが展示してあった。

渉が運転席に乗り込むと、美樹も助手席に乗り込んだ。

近づいて来た40歳くらいの営業マンに、守が声を掛けた。

「この車は、いくらですか？」

「かしこまりました。では、御見積りを致しましょう。あちらに腰掛けてお待ちください。」

守と知佳、誠とみずきは、椅子に腰かけたが、渉と美樹は、車から離れずに他の営業マンから説明を受けていた。

少しするとお店の女性が、アイスコーヒーを持って来てくれた。

渉と美樹以外の者達が、アイスコーヒーに口を付けると間もなく、先ほどの営業マンが資料を手に戻って来た。腰掛けるとすぐに資料を開き、テーブルへ載せた。

「お待たせしました。基本的な金額はこの様になります。サウンドパッケージなども有りますが、オプションで何をお付けになるかで、金額は変わります。下取り車は、御座いますか？」

守は、即答した。

「いえ、有りません。」

「では、オプションは何かご希望は御座いますか？」

守は、良く解らないから、車を見ている渉に声を掛けた。

「おい、渉！ 何かオプションで付けたい物は有るのか？」

渉は、展示車に夢中だった。

「任せるよ。」

守は、装備が充実したものが好きだった。

「じゃー、付けれる物みんな付けてください。ステレオとナビは一番いい物を付けて。」

「はい、それでは、一番高い物で。では、お色は如何しましょうか？」

守は、渉の気に入った色にしようと思った。

「渉、色は？」

渉は、展示車両を見ながら答えた。

「これが、いいよ。」

「それじゃー、あの車と同じグレーメタリックで。それと、支払いは、今、一括現金で。」

「分かりました。ありがとうございます。では、御見積りを作成して参ります。」

約10分後に、営業マンは戻って来た。

その後、オプションで付けた物や今後の説明が行われて、契約書にサインをした。

値引きは期待出来ない車で、大したことはなかったが、守は気にしなかった。

営業マンは、ポーカーフェイスを決め込んでいたが、この瞬間は、少しだけにやけたように見えた気がした。

「では、お支払いの方はよろしいでしょうか？」

守は、カバンからおもむろに1000万円を取り出した。

それを見ていた井上知佳が、思わず声を出した。

「すごい！ 私、1000万円の札束、初めて見た！」

上野美樹の目も輝いた。

「わたしも初めて！ 1000万円って、そのくらいの厚さになるんだー。」

橘みずきも何か言わずにはいらなかった。

「すごい！ でも、そんな大金が、そのカバンに入っていたとは、誰も思わないね。」

涉が守の代わりに答えた。

「それが狙いで、ブランド物でもない汚いカバン使ってるんだよな、守？」

守が、照れ臭そうに言った。

「まーね。」

代金を払い終わると、展示してある車をみんなでいじり回した。

涉が、得意げに誠に言った。

「なーっ、誠に！ かつこいいだろうー。」

誠は、正直それほど良いとは思っていなかった。

「ん〜、まーね。」

「えっ？ カッコイイと思わないの？」

「ん〜、それほど普通の車と変わらないじゃん。」

上野美樹が、どうして解らないの！と言わんばかりに言った。

「すごく速いのよー！」

「走らないと分からないし。」

橘みずきには、誠に涉と美樹に攻め立てられているように見えてきて、誠の味方をしたくなった。

「私も、普通の車と変わらない気がする。」

井上知佳も、車の事は大して解らなかったが、みずきが、良いタイミングで誠の後押しをしたのが、気になった。

「あ〜あ〜、みずき、ったら、恋人気分？」

「もー、違うよー、私もそう思っただけよ。」

井上知佳は、車に興味がなさそうな誠に、ちょっと気になった質問をしてみた。

「誠さんって、好きな車って有るんですか？」

誠は、考えるしぐさも無く、瞬時に答えた。

「ランボルギーニかな。」

渉が、相当びつくりした声を上げた。

「えっ！ランボルギーニ？ 初耳だー。」

井上知佳は、自分にでも解るような名前が返ってくると思っていた。まさか、車好きの渉がびつくりするほどの名前を言うとは、どんな車か興味を持った。

「それって、カッコイイんですか？」

上野美樹が、思わず漏らした。

「あれは、凄いよ！」

守も、誠の口から出るとは思ってもみなかった。

「本物見たことが無いけど、映画で見たなー。カッコ良かったなー。」

橘みずきも、どんな車か知らなかった。

「そうなんですかー、見てみたいなー。」

守は、割と単純に行動を起こすタイプだ。

「見に行ってみようか？」

上野美樹も、見たくなかった。

「行こう、行こう！」

第29話 「高い中古車」

第29話 「高い中古車」

守は、本気で見たくなって、すぐにも行くつもりだ。

「渉、何処に行けば見れる？」

「ちょっと待つてー、携帯で調べてみるから。」

守は、みんなの顔を見渡した。

「みんな都合は大丈夫？」

こうなつたら橘みずきに他の用事なんて有りはしない。

「誠さんが好きな車、どんなのか見てみたーい！」

井上知佳は、自分が蒔いた種でも有り、行かないわけにはいかない。

「はいはい、付き合います。」

渉が、携帯を見ながら答えた。

「青山で、売ってるみたいだなー。」

車にさほど興味の無い守だったが、誠が好きだという車をこの目で実際に見たくてたまらなくなった。

「よし、行ってみよう。誠に好きな車が有るなんてびっくりだもんなー。」

渉が、携帯をしまいながら、誠を見た。

「フェラーリーでなくて、ランボルギーニってところが、誠らしい

というか。」

カーショップを出ると、渉が手慣れた感じでナビをセットして青山へ向かった。

30分程で、目的の店に着いた。

車から降りると、みんなどれほどの物か、興味津々で店に向かった。ガラス張りの店の前まで来ると、みんな立ち止った。

「凄い！」知佳が、思わず声を出した。

みずきや美樹も、声には出さないが、目は釘付けになった。

「早く入ろっぜ！」渉が、みんなをせかした。

店に入ると、皆の顔色が変わった。

新車が2台、中古車が5台展示されていて、その羨望なスタイルに圧倒された。

井上知佳が、ランボルギーニを目の前になると、驚きの余り声を出した。

「何これ！ 車じゃないみたい！」

上野美樹も、実際に見ることの少ない車を目にして感動している。

「やっぱり、すごいー！」

橘みずきは、今までに見た記憶が無いようだ。

「誠さんが好きなの分かる気がする！ 他の車と全然違う！」

土田守も、一度に7台の実車を間近かで見るのは初めてだ。

「確かに。俺も誠と同じで車に大して興味ないけど、これは違う。

なんか欲しくなってきた。」

橘みずきが、指を差した。

「何あれ。ドアが上に上がってる！」

水越 渉は、得意げに答えた。

「ガルウィングと云って、ランボルギーニのウリの一つだよ。」

営業マンが、声を掛けてきた。

「いらっしやいませ。何か有りましたら、御声をお掛け下さい。」

営業マンの雰囲気、何処となく落ち着いた感じだ。

守も少し緊張した感じになった。

「はい、ちょっと見させてください。」

営業マンは、にこやかに軽く会釈した。

「どうぞ、ごゆっくり。」

井上知佳が、車を覗きこんだ。

「これって、低すぎでしょー、寝て運転するみたいだよ。」

水越渉が、反対側から、覗きこんで言った。

「そこがいいんですよ。」

橋みずきが、フロントガラスに置かれたプライスカードを見て驚いた。

「えっ！ 2300万円？ たかつ！」

上野美樹が、横の銀色の車を見て言った。

「こっちは、1800万だよ。」

水越渉が、内側に向いている2台の新車の方から言った。

「そっちの5台は、中古車だよ。」

上野美樹は、中古車だとは思っていなかった。

「えーっ！ 中古なのに、みんな1000万以上だよ。」

土田守が、誠の傍に行つて聞いた。

「誠は、どれが好きなんだ？」

野田誠は、実はランボルギーニに色々種類が有るとは思っていないかった。

「えっ？ あゝ、まゝ、どれでもゝ、あつ！これなんかいいかも。」

土田守は、誠が指を差した車が、いくらするのか気になった。

「これかー、新車つてことは、最新型なんだなー。えっ？4200万。」

水越渉が、2人の傍にやつて来た。

「ムルシエラゴだよ。結構速いんだよねー。」

守が、営業マンを呼んで、座つてもいいか聞いた。

営業マンは、少しためらつた表情をした。

おそらくは、20歳くらいのが6人で来て、べらべらしゃべっている姿を見て、買う気の無い見学者だろうと思つているのだろうと、守は感じた。

「あの一、僕達は、ただの冷やかしじゃないですよ。買う気は有りますから。」

営業マンは、苦笑いを浮かべながら、

「どうぞ。」と言つて、ドアを上に向けて開いた。

良いということ、一人ずつ恐る恐る運転席に乗り込んで楽しんだ。

土田守は、営業マンに言った手前もあり、にわかには本気で買う気になっただけ。ただ、4200万円はさすがに、父親に交渉する気にはなれなかった。

「誠、これ以外はどれが好きなんだ？」

野田誠は、道路の方に向いている中古車の方を指差した。

「そっだねー、向こうの黄色いのかなー。」

土田守は、誠とその車の方に歩いた。

「よし、ちよっと乗ってみよう。」

渉もその黄色の中古車の前に来て、得意の解説をした。

「これは、ムルシエラゴの前のランボルギーニを代表するモデルでディアブロだよ。12気筒エンジンだし、ガヤルドよりも俺は好きだけど、旧型だし中古車だから、守は嫌だろ？」

土田守が、プライスカードを見た。

「まーな、でも1400万か。中古車の金額じゃないよ。」

守が、眉間に右手の指を当てて考え込んだ。

水越渉は、守のそのポーズは、本気で考えている時にだけする事を知っていた。

「お前、まさか買う気？」

土田守は、右手を下げると言った。

「おー、久々に、ほしーい、って気持ち湧いて来たよ。」

誠が好きだって言うのも分かる。」

守は、営業マンの方に歩いて行き、何やら話し始めた。

電卓を叩き始めて、割と時間が掛かっている。

守の様子もいつものヒョーヒョーとした感じではなく、真剣だ。

10分くらいして、守が笑顔で戻って来た。

「よっ！話がついた。これ買っぞ！諸費用込の乗り出し価格で1400万にしてもらった。」

みんなが、一斉に声を上げた。

「おい！マジで？」

「すごーいー！」

第30話 「お金持ち」

渉が、妙にニタニタ嬉しそうにしていたので、守が言い出した。

「オイ、勘違いすんなよ。渉は、GTRに乗れんだから。これは、俺の足に使うよ。まー俺にこんな車を教えてくれた誠は、空いてる時なら乗っていいけどさ。あつ、免許無かったんだっけ？」

野田誠は、端からこんな車を運転しようなんて思っていなかった。

「いいよ、俺は。ぶつけたら大変だし。」

水越渉が、口を挟んだ。

「そつだよなー。免許取り立ては、絶対にぶつけるからなー。俺が代わりに乗ってあげるよ。」

橋みずきが、渉の言葉に反論した。

「そんなことありませんよ。誠さんは、運動神経いいですから。免許だつて取る気になれば、きつとすぐに取れちゃいます。ねっ！誠さん。」

野田誠は、右手で頭を掻きながら言った。

「どうかなー。球技は自信有るけど。」

橋みずきが、いつに無く積極的だ。

「ねえー、すぐに免許取つて、この車で私をドライブに連れて行ってよ。」

土田守は、実は誠にもこの車を運転してもらいたかった。

「誠ちゃん、免許取るしかないな！ 前にも言ったけど、費用は貸

してやるよ。返済は利子なし分割で何回でも、いつでもいいからさ。」

橘みずきが、喜んだ。

「やったー。考えることないじゃん！すぐに教習所通ってよ。」

野田誠は、みずきが喜ぶ理由が良く解らなかった。

「お金を返すあてが無いんだよ。」

橘みずきは、今しかないと思った。

「いつでもいいって言ってるんだから。就職してからでもいいじゃない。」

ねえ、守さん？」

土田守は、本当は返してもらわなくてもいいと思っていたが、それでは、誠のプライドが許さないだろうと思って、分割払いを提案していた。

「あー、別にいいよ。」

橘みずきは、もう畳み掛けるしかないと思った。

「ほら、決まり。明日、一緒に教習所に行こうよ。ねっ！」

水越渉は、聞いてて羨ましく思えた。

「もう、決まりだな。」

これほど勧められると、誠は、もうどうでも良くなっていた。

「仕方ないかー、いつか取るものだし。」

橘みずきは、笑顔で誠に向かって言った。

「そっだよ！ それじゃー、明日も、1時に蒲田駅ねっ！ 約束だ

よ。」

井上知佳が、いつもと違うみずきを見て、啞然としていた。

「みずきったらー、凄く積極的。」

橘みずきは、ニコニコしながら言った。

「そんなことないよー。私も来年免許取るつもりだから、予習のつもりなんだよ。」

「そうかなー、誠さんと一緒にいたいって聞こえるけどなー。」

「あらーっ、知佳ちゃん。私の事より、昨日の勢いは何処に行っちゃったのかなー？」

「私は、そんなに心配しなくても、この車に乗せてもらえるものねっ、守さん！」

「あー。行きたい所、考えておきな。いつ納車出来るんだろう。話詰めて、契約しなきゃ。みんな、適当に見てて。」

水越渉が、守の後姿を見て呟いた。

「あいつ、本当に買う気だよ。」

野田誠も、渉と同じ気持ちだった。

「羨ましいなー。」

橘みずきの耳に、2人の呟き声が入った。

「何言ってるのよ。渉さんだって、誠さんだって、自分の車のように乗せてもらえるんだから、凄いじゃない。そういうお友達を持つ

てるってことが、お金を持ってるってことよりも、凄いことじゃないの。」

「そーだよ。お金持ちは、大事にしなきゃね。」
美樹が、笑いながら言った。

井上知佳が、首を傾げた。

「美樹ったら、分かってるのかなー。」

上野美樹が、すぐに答えた。

「ジョーダンだっーの。もつは、お金持ちの友ねー。」

「やっぱ、分かってないし……。」

「ジョーダンだっーば!」

車好きの水越渉は、新車の前に行って、しげしげと眺めた。

「さすがに守でも、このムルシエラゴは、手が出なかつたか。」

渉に付いて来た野田誠が、質問した。

「4200万なんて。何でそんなにすんだよ。」

水越渉が、答えのような答えで無いような言い方をした。

「ランボルギーニのフラッグシップだからね。」

野田誠は、そう聞いても理解できない。

「よく分からないなー。」

「好きだって言うから、知ってるのかと思ったら、スタイルだけだったんだな。」

誠が、凹んだ顔をしていたので、橘みずきが代わりに言いたくなかった。

「この形見たら、スタイルだけで十分よ。値段からして、中身だつて凄いいんだろうし。詳しくなくても、乗りたくなるわよ。」

今度は、女の子に言われて、言い返せないでいる渉に代わって、井上知佳が言った。

「はいはい、お車の好みも誠さんと一緒なのは、よく分かりました。でもさー、今日一日で、2台で2300万円くらい使ってるんでしょ。凄いいねー。」

性格もいいし、ルックスもそんなに悪くないし、本気になっちゃうかも。」

上野美樹が釣られて、つい呟いてしまった。

「私も、守さんがいいなー。」

水越渉が、ちよつと焦った。

「美樹ちゃん、何言い出すんだよ。俺が、居るじゃんって。」

「そもそも、何で私が涉さんと、ペアにならなきゃなの？」

「それはー、俺が、美樹ちゃんを気に入ったから……。」

「何で？」

「可愛いから、俺の好みだからさ。」

「可愛いなんて、そんなことないし、あなたの好みだとして、外見だけでしょ？」

「そんなことないさ。性格というか、雰囲気とかさ。」

「ほんとかなく。誰にでもそんな事、言ってるんじゃないの？ 他にも付き合ってる子がいたりして。」

涉は、一瞬、ドキツとした。

「な、なにいつてるのさ。そんなことあるはずないじゃん。」

「その言い方、なんか怪しい。」

その時、守が、戻って来て2人の横を通った。

「さあー、行くぞ。」

誠が、守に聞いた。

「本当に買ったのか？」

「おー、誠も乗れるぞ。」

第31話 「似た者同士」

守が来た事で難を逃れた涉が、美樹からまた質問をされるのを、ごまかすために守と話そうとした。

「守、行ってくつて、何処行くんだよ？」

「あつ、そっかー、決まって無かったけ。」

誠が、どういう訳だか急に真面目な事を言った。

「時間も時間だし、君達高校生は、帰った方がいいんじゃないのかなー。」

上野美樹が、何言っちゃってるの？とばかりに返事をした。

「まーだ、4時じゃない。カラオケでも行こうよ！」

ねっ、みずきも知佳もいいでしょ？」

「イエース！」

誠の言葉など誰も気にする者はなく、カラオケに行くことになった。全員、車に乗り込み、彼女達の家に近い方が良いということで、横浜に向かった。

3人が良く行くという上大岡のカラオケ店に行くことになった。着くと、5時半になっていた。

店は空いていて、すぐに部屋に案内された。

みんなが座ると、上野美樹が呟いた。

「なんか、お腹空いちやったー。」

「私も。」と、井上知佳が、空腹で元氣なく続けて言った。

こんな時の土田守には、決まり文句が有った。

「オツ！ 何でも、好きな物頼めよ。俺のおごりだ。」

井上知佳に、元氣が戻った。

「カツコイ〜！」

水越渉が、呆れたように言った。

「そうか？」

上野美樹は、渉の言葉に反応が速くなった。

「そうだよ。じゃー、渉さんのおごりでいいの？」

「ノーノー、無理無理。」

井上知佳が、苦笑いしながら言った。

「でしょー！ やっぱ、違うのよねー。」

全員がこの時とばかりに好きな物を注文して、カラオケ店とは思えないほど、次々と料理が運ばれて、テーブルは、あっ、という間に埋め尽くされた。

カラオケもいつの間にか、美樹が歌い始め、その後も、ひきりなしに誰かが続き、5時半から始まったカラオケ会も3時間が経ちお開きとなった。

誠が蒲田の自宅に戻って、風呂から出てのんびりしていると、携帯が鳴った。

橘みずきからのメールだった。

「今日は、楽しかったよ。ありがとう。」

誠さんの意外な面も見れたし、凄い車も見たし。

「みずき、明日も1時に蒲田駅でなんて言っちゃって、ごめんなさい。」

明日、本当に教習所に行きますか？

もし行くのであれば、みずきも一緒に行きたい！

待ち合わせしてもらえますか？

お返事待ってまーす？」

誠は、話の成り行きで言ってしまったが、本当は教習所に行く気にはなれないでいた。しかし、みずきからのメールを見ると、今さら行かないとも言いだせなかった。仕方なく、教習所を覗くことにして、みずきにメールを返した。

「こちらこそ、今日はどうもありがとう。楽しかったよ。」

それじゃー、明日も蒲田駅で1時ということで、よろしく。」

みずきも、誠が本気で教習所に行こうと思っていたのを感じていた。だから、その気になるようにと、メールをしたのだった。そして、その作戦は成功して、明日は、2人だけで会うことになった。

そして当日、誠は時間の読めない慣れないバスを使って、30分も前に駅に着いてしまった。

きのう美樹が、言っていた気持ちは何となく分かった。

待ち合わせ場所の改札口へ歩いて行くと、まさかこんなに早く、みずきが来ているとは思っていなかったが、みずきらしい姿を見て、慌てて近づいた。

それは、みずきだった。

「みずきちゃん！ 待った？」

「んーん、来たばかり。」

「そっか。良かった。昨日の美樹ちゃんじゃないけど、待たせるのは良くないからね。」

「いいよ。でも、本当のこと言うと、2時間前に来てたの。んーん、最初からランチしたり、本屋さんに、行く予定だったからいいのよ。気にしないで。」

「えっ？ 2時間も前に！ 気にするなって言っても……。電話くれればよかったのに。」

「んーん、約束は、1時だから、いいの。」

それに、こうやって、30分も前に会えたし。さあー、行くつよよ。」

「でも、どこに教習所があるのかわからないんだよね。」

「それなら、電話帳で探せばいいよ。」

2人は、電話を探した。

割とすぐに見つかり、電話帳をめくった。

誠が、教習所の広告を見つけた。

「あった！ 送迎バスが、この駅まで来てるじゃん。」

「ラッキーだね。でも、どこで待てばいいの？」

「電話して、聞いてみるよ。」

誠が電話をすると、なんとなく場所が分かった。

そして、その待合場所に行ってみると、小さな送迎バスが来ていた。

バスを見ると思わず、橘みずきが声を出した。

「わっ！ グットタイミング。きっといいことあるよ。」

「みずきちゃんって、みんなと居る時と雰囲気が違うね。」

「えっ？ もしかして、嫌われちゃった？」

「いや、その逆。」

「ほんと？」

「明るくて、良い感じ。」

みずきが、歩く足を止めて、誠の顔を見上げた。

「なら、私と付き合って！」

二人の目が合った。

みずきの目は、そのニコツとした笑顔とは不釣り合いに、とても不安そうに揺れていた。

橘みずきは、今まで自分からこんなことを言った事など無かった。だから、返事を待つ気持など考えた事も無かった。

あまりの緊張から、みずきの瞳を涙が濡らしていた。

誠は、思いもしない突然の状況で、金縛りになった。

しかし、黙っている訳にはいかない。

「そうだね。」

みずきの目を見て、断ることなんて、誠には出来なかった。

「えっ、いいの？」

「いいよ。だけど、君が思うほどの男じゃないと思うよ。」

「どういうこと？ 何か隠してる事でも有るの？」

「そういう意味じゃなくて、何の面白みも無いつまらない男ってこと。」

「どうして？ そんなことないと思うよ。」

「前に、一緒に居てもつまらないと言われた事あるからさ。」

「そーかなー、それは、何か別な理由が有ったんじゃないの？」

「別な理由？」

「例えば、その子は、誠さんに特に興味がないとか、他の性格の人がタイプとか。」

「そーかなー。」

「あっ！ もしかして、誠さんが、その子のことが好きで、一緒に居ると緊張してたとか？」

「えっ！ 何でそんなこと。」

「その顔は、ずぼしでしょ！ だって私は解るもん。誠さんのそういう性格。私も似たようなところが有るから。」

「そうなんだー。」

「そう。昔私も、仲良くなる前に、好きって気持ち先行しちゃって、その人の前では、緊張して何も話が出来なくなっちゃった事が有って失敗したことがあったから。その時の教訓で、好きって思う前に、少しでも良いなーって思ったら、無理やりにも頑張ってる訳山しゃべるようにしたんだ。つまりは、私みたいな性格は、一目惚れはしちゃダメってことね。誠さんもそうなんでしょ？ その子とは、初デートだったんでしょ。」

「えっ・・・まー、そんなとこかな。」

「そーかー、誠さんにも、そんなことが有ったんだー。」
みずきは、何だか嬉しそうに、にこやかに歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9681u/>

もし、彼女がスターだったら・・・

2011年12月18日10時52分発行